

萌芽落花ノート

【設定】

萌芽落花と書いてホガラカと読ませた。喫茶店の名前だ。

時は昭和五十年頃、所はありふれた地方都市。

店内には落書き用のノートが常備されていた。客は好き勝手なことを書いていい。レジ近くの壁の前には何冊も古いノートが並んでいる。それを読むのが楽しみで訪れる物好きがいた。ずっと以前に自分が書いたものを読み返すために、わざわざ遠い所からやって来る客もいた。だが、ほとんどの人は読まない。書かない。手に取りさえしない。触れただけで何やら悪い病気に罹りそうな気がするらしい。

ご注文は何になさいますか？ お奨めは田舎者のココアです。苦くて甘いよ。

リクエストも承っております。

1 人間はいないのか

「人間はいないのか」と呟きながら

真昼にカンテラを下げて歩く君

「人間はいないのか

それとも私には見えないのか」

鏡の前で佇むことの下手な君にできるのは

呟くことだけだ

「人間はいないのか

それとも私には見えないのか」

もしも出会えたら？

ぽつと頬を赤らめればよい

2 秘められた歌

かつて 地上のどこにいても聞かれた歌が

どの民族、どの村人の胸にも 深く刻み込まれていた歌が

違った旋律だから

微妙に違っているから

忘れられた

地球がまだ自分の力で輝いていた頃に生まれた歌が

傷付きながら育った歌が

今は忘れられた歌が

今 歌われれば
すべてが思い出されよう
暗い時代を超えよと
王家の宝は秘められる

3 奪われた歌

歌が聞こえる
遠くから いつからか
おれの内部から

きっとだれかが歌う
だれかの鼓動が
おれの旋律に共鳴すれば

おれの腕を返せ
おれの下半身を返せ
おれの眼差しを返せ

犯されたおれたちは
犯されたおれたちを
厭いながら歌う

返せ 返せよ
おれを返せよ おれに
だれかを返せよ だれかに

返せ 返せよ
おれの旋律を返せよ だれかに
だれかの鼓動を返せよ おれに

4 にほんのをんな

おまえわ
涙をしたつもりであるが
ならば

そんなにも
死にたい死にたいとゆうな
おまえの髪は
そんなにもながいのだぞ

そうじせんたくがすんだら
おそすぎる朝飯をくおうよ

だが そのまえに
こんなにも
生きたい生きたいとおまえにすがる
おれをだいてゆけ

5 酔っぱらいの朝
目が覚めると
だれもが死んじまったく朝だ

靄を割って駆けだそうか
まるで生きているみたいに

暗い中で息を潜めていたのは
夜明けを待っていたからじゃない

酔っぱらいの並べた小間物が広がる
ぬめぬめ

笑い涙で眺めている
ずっと前に終わっていたんだ
戦争も
革命も
飢えも寒さも
幸も不幸も

目が覚めると
人間ぼっち 終わっていたんだ

始まる前から

6 空飛び魚

くくっと曲げる
ぱん
叩くと
海は恥部を露わにする
空は両手を広げて

すくと伸ばす
つん
抜けると
海は患部を覆う
空は両手を閉じて

空が海になるので
海が空になるので
どこにもいない おれ

ああ こんなにも高く
高く舞い上がるとは
思わなかつた

飛んでゆくのか
墜ちてゆくのか
青の中の一点の怠惰

死んだみたく自由さあ

7 凤は業火に新たな命を獲るか

××膜は女を抑圧するか
切り裂くべき××は過酷か

絶対××的自己××は寄生虫の自慰

押しとどめるのは誰でもない

おまえだ

首を絞めるのも

おまえだ

したり顔のおまえだ

滴り落ちる××の血漿は天翔けるか

挽かれたコーヒーの前で

引かれ者の小唄すら濁し

擦りきれた幕を下ろしては上げる

ななたりにななたり穿たれよ

しかして

四十九を n 乗して一瞬の業火と化せ

そのあやかな兆しの最中——

鳳は業火に新たな命を獲るか

8 羽音

令子のスカーフがきっと絞められたので、僕は諦めてコートを着せ掛けた。

ゆらゆらと薄暗がりの狭い階段を下りて来るタイツの脚。

両手に踵の高い靴を分け持ち。

振り返りもせず、男物の靴が散乱する玄関を通過。

僕の声に答えるのは、背中のスカーフだけだ。

そんな仕草を古い映画で見たよ、確かに。

喫茶。

「何になるの、こんなふうに生きてて」

そんな台詞が深夜のラジオから流れているのを聞いたことがあるよ、多分。

僕のコーヒーは冷めた。

令子は、縞になったココアのカップの内側を見下ろしている。

ざわめく倦怠。

気まずい思いが煙草の煙となって、二つのカップの間をゆったりと上る。

僕は、いつからか、おかしな音を聞いている。僕だけは、多分。

物憂い音楽が途切れて、僕はやっと言葉を見つける。見つけたふりをする。耳鳴りを翻訳した。そのつもりだ。そのつもりになれたらいいのだが。

「君は誤解しているらしいね」

令子は聞き飽きた昔話を聞かされたときのように溜息を漏らしてから、小説か何かを読んで覚えたらしい単語を並べる、カード遊びのように。

「だから、どうなの、あなたは」

僕は切り札を出す、ゲームのルールは知らないのだけれど。

「僕も誤解していたらしいね」

「私も誤解してたのよ」

どこかで誰かが笑う。

「初めてだね、意見が合うのは」

令子の目が大きく開く。

コーヒーを啜ろうとしたら、いつの間にか、令子が起立している。

見上げると、作り笑い。それが仮面のように剥がれて落ちたぞ。捨え。

「もう会わない」

そう。それがいい。

だが、僕の返事を待たず、空席が生じる。僕はずっと空席に向かって話しかけていたみたいだ。苦笑。

口を利くことも立ち上ることもできないまま、コーヒーで唇を濡らす。

勘定を済ませて店を出ると、令子が手を挙げている。タクシーが停まった。

言葉にならない声に応えるつもりか、令子は無邪気な笑顔を向けた。

「お元気で」

意外に簡単だったな。

耳鳴りがグインと持ち上がった。それが街頭の騒音と馴染んだり纏れたりする。どれが内部の音で、どれが外部の音か。

まるで明日が来るのを憎んでいるみたいな人波に紛れ、僕は今日が終わるのを頼りにして、歩く、どこへともなく。

ああ。この倦怠。

令子に憎まれたかった。令子が「あの男」を憎むように。そうすれば、僕も令子を憎むことができる。そうすれば、「あの女」と呼んで笑ってやれる。令子が「あの男」を笑うように。

歩道に唾を吐く。

僕は誰をも憎まない。憎むということがどういう仕事なのか、知らない。だから、令子に憎まれたい。

人の姿が奇妙に巨大に見える。驚く間もなく、ぐぐっと縮む。口の中が粘つく。

巨大な、巨大な、膨大な……

耳を塞ぐと、耳鳴りの音量が上がる。

人の姿を見まいとすれば、人の姿が巨大化する。

考えまいとすればするほど……

そして、何分かが経過した。何時間か。何日か。

僕はずっと同じ場所にいる。座り込んでいる。

路面に人の影が伸び、見上げると、令子だ。僕に笑いかけている。いつだろう、今は。

「人が見てるよ」と言うと、令子は大人しくなった。

編上げのブーツは脱がせず、四畳半に連れ込む。

掴んだ手を放すと、令子は赤く染まった手首を擦る、わざとらしく。そして、上目使いで唇の端を引き上げる。平手打ちをくれてやる。一度ではなく、二度、そして、三度。肩を引き寄せて唇を奪おうとするが、それは固く結ばれて開かない。突き放すと、コートをするりと脱ぎ、それを振り回す。画架から書きかけの絵が落ちる。

やがて疲れ、壁に凭れて、はあはあ、息を吐く。だが、冷たい視線を僕から離さない。

そうだ。憎め、僕を。憎まれている間だけ、僕は自由だ。

こんな光景を、いつか、見た。夢か？

令子は何やら語ろうとするらしいのだが、喉からヒューヒューという嗄れた声しか出ない。それは、声ではなく、音だ。耳鳴りのような音。

「死んだ女が抱きたいの？」

一度も解かれたことのないスカーフが滑り落ちる。喉には、斜めに赤黒い線が走っている。僕は恐れた。その傷跡が口を開き、本当のことを語り始めそうに思えたから。

黙れ！ そして、語れ……

僕は、裂けそうな口を封じるために、首を絞めた。

「苦しいか。苦しめ。もっと苦しめ。これでも死んでいると言うのか」

答えはない。目も答えない。

自分の言葉に自分の行為を知らされ、僕は手を緩め、そして、半歩、退いた。

どちらの口も開かない。だが、何者かが語る。

「思い出した。とうとう思い出してしまった。折角忘れていたのに」

僕は藁人形のような女体を引き寄せる。

「嫌らしい虫たち。何て嫌な音かしら。飛び廻ってるのよ、そこら中を。ねえ、聞こえるでしょ、あの羽音が」

羽音？

羽音——

そうだ。羽音だ。

耳鳴りは、嫌らしい虫たちの羽音だったのだ。知っていた。忘れていただけだ。いつか、どこかで耳にした。そのはずだ。

いつからか、終わりが始まっていた。終わりは今も始まり続けている。

パンドラの匣が開いてから。

無数の邪惡な虫に交じって、一匹の〈希望〉が飛び立ったために、終わりが終わらないのだ。

僕は生きている死体に跨り、絶望との一体化を試みた。

奈落が欲しかった。誰かと二人で落ちて行ける奈落が。

——令子が遣る瀬無さそうに髪で顔を隠すのが、僕にははにかんだように見えた。

9 少年期

氷に触れると

指先から哲学が始まる

肉は思索をものにし

僕は自分を氷だと思う

さもなければ

汗つかきの僕は

氷を手放さねばならなくなり

苦悩と悦楽を仮定して

輪廻を擡げ

僕は自分を宇宙だと思う

惑いは青草の地平線を焦がす

ト 置くと

仮面の奇蹟は方程式を満たすか

さもなければ

詩を書く僕は

スクリーンに伺候する干からびた光に

火を点けねばならなくなり

糖衣錠の異称は

真理と称えながら

空間もろとも

ぽっくり 断ち割ってやろう

さもなければ

さもなければ

(果てしなく奪回されざるがゆえに)

10 溶鉱炉について

己自身を熔かすほどの
愚かな熱を発して
溶鉱炉は
きうん きうん
夜泣きした
陽炎が昇り
景色は優しく揺れる
もっと熱くなれと
扉という扉は閉ざされた
ひとりぼっちになると
煙突ばかりが
夜空を焦がそうと夢見た

己自身を熔かす己は
爆発する前に
がた がた
震えた
寒いのかと
また思い出を焚いた

11 杖突いて逃げる

あの月は
巧みな暗殺の前触れなのだ
夕陽は ぽっくり 逝ったね
ほら
川面を 紅い手袋が流れていくよ
年齢不詳の捕虜は
ピロピロピー
鳴物入りで 杖突いて逃げる
絞められた瞽女は橋桁に引っ掛けあって
紫の土左衛門

いい月だね

浪漫的（ロマンチック）に耳打ちすれば
ヘラヘラ ヘラヘラ
笑うんだろうね

12 やくざめがね

やくざめがねを外すと
世の中
止まる

鳥は舞い降りても
飛ぶ姿を思わせたのに
飛ばない鳥は飛べないのか
と やくざめがねを外すと
鳥は羽ばたきのまま
天空に打ち据えられ

やくざめがねを外すと
地球は停止し
逆転しそうになる
知らぬが仏の居眠りと
一杯機嫌の議論好きは
急ブレーキのかかった地球から
ふっとんでって

するとやっぱりやくざが言うには
飛んだつもりが飛ばされて
三日月の刃先に腹を抉られ
たった
射抜かれた鳥だけが
いつか地上で
きよとん
生傷を舐めているのさ

13 雀によせて

雀は哀しい生き物だ
年がら年中 嘸って
年がら年中 跳び回る
何を食うのか 知らないが
何を食おうが 構わない
どうせ 小さな嘴だ
人がいなけりや 道端で遊び
人が通れば 散るだけの
どうにもこうにもありやしない
ただ生きてるってだけじゃないか

ほう

歌うのか
おまえも歌うのか
その嘴で
そういうや おまえも
何やら 文句があるらしいなあ

14 初恋

十六の秋
私がまだ日本語を信じていた頃
鏡に映った日本語の輝きに代わるもののが涙だという
そんな日本語の輝きを受けて
私はあなたに恋したと信じた

法悦と朦朧の合間に
日本語は一筋の閃光となって鏡の部屋を乱舞し
私は笑いながら速度を待ったが
明け方
恋は腹這いのまま
窒息していた

日本語の輝きは薄れ
涙は一滴も零れなかつた

15 恋情

キツイ

接吻 ニ

手鏡 ワ

髪 オ

ツトーテ 滑リ落チ

血 ワ

流レヌ ママ

破片 ワ

笑ッテ

両眼 ニ

喰ライツキ

わたくし ワ

盲イタ

やつと

鏡は影を宿しておるか

鏡は影を欲しておるか

否

否

否

こいびとよ

鏡と知れぬ

鏡の前で

わたくしはおまえを許すぞ

やつと

16 非・時代

果たして

(ト長い沈黙があつて)

蝶は絞められていた

はらはらと命の絶ゆべき時代よ

掠め取った鱗粉は

陳腐な地下の実験室で
笑い上戸の鍊金術師どもが
蘇生の妙薬を捏造せんと
儂い涎に溶いておろう

もはや季節も麻醉する
飛翔の粉は
新たなる時代に向けて搾取された
乞食よ
野に出たもうな
もはや舞い上がれはせぬ

笑い死にする定めの愚民どもは
風に巻かれて追い立てられて吠える
「心あらば歌え
死にゆく蝶のため
歌ってやれ
のう
歌ってくれよ」
「我が琴は
絃を切ったり」

青き青虫さえ
風のまにまに
乞食の髪の一筋に
絞めらるる時代よ

17 ビニール色の夜

殺人の無かった日、私は隔離されていた。
看守は鍵を掛けないしきたりだから、脱獄さえままならない。
差し入れを包んだ新聞紙は、古いのに、行間は白く、あくまで白く、白々しい。
「真夜中の塵紙交換車を撃て」と、秘密指令が読み取れた。
支給された二十発足らずの弾丸は我々のあらゆる貧しさを伝えている。
夜は闇に紛れるものだという常識を闇却するには足りない。
待ち伏せをしながら時計を気にしたのがいけなかった。

意味世界は充溢を禁じ得ず、何者かを私に仕立てた。
唐突な光線は漆黒に相似だからだ。
狡猾にも、背後に潜む塵紙交換車は、ヘッドライトで擬似世界を凝固させた。
習俗ともいう。
手柄話ともいう。
火のない煙ともいう。
私はビニール色の夜に変身し、潜行し、疾駆する。
夜は、もっとも遠い近くから、無目的な遊歩道へと追い込むのだった。
夜を泳がされながら、夜のつもりの私は、涙を戦闘の血の色に偽装する。
極寒は灼熱だった。
明日は昨日だった。
飢渴は膨満。
手首は矢印の尻尾。
ここは、ここではなかった。
終わりのない緊張が牢獄を建造した。
牢獄は弛緩を蔓延させた。
不在の敵が冷笑した。
ビニール色の夜はビニールを捕縛した。
秘めたるものはすでに失われていた。
黙秘するための秘密はなかったのだ。
処刑の前夜、私はやすやすと自白した。
「今こそ夜明けとともに透徹した夜が始まる」
覚えているか？

18 ココアを一口

ご注文の田舎者のココアです。あの、心を苛立たせない、お年寄りから赤ん坊まで、誰でもおいしく飲める、甘くて苦くて温かい不安解消のココアです。

(台詞)

「わざとらしすぎるんですよ、あなたは。だからって、本当らしいのも、また考えものなんですけどね」

「あつ。そうか。なるほど。してみると、僕って、あれだよ、やっぱり、ほら、あの、そう、可哀想なんだな。と、こういうので、どうかな」

「ううむ。そうね。じゃあ、こう考えてみたら、どうかしら。つまりね、君の場合、こういうことなんだろう」

(ト、ここでココアを一口)

ズズズ。

19 あたしなんか

あなたは知るのだろう 霽の街
酒煙草愛涙
欲しいのね たつた一つの言葉
何もかも裏切るみたいな強さで
逆るコーク 栓を抜けば
空の力で
空間を奪うから
「あたし、酔ってる？」

明日なんか来なければいい
このまま歌に歌われて
時がすべてを噴射するなら
将来の希望は小さくとも
小さな家を建てる事でも
永遠の愛を享けて美しい池を
拭い拭いする先から
微笑んで小刻みの踵を濡らすので
「あたし、このまま……」

誰があなたを知るのだろう 霽の街
酒煙草愛涙

20 壁と花

四畳半の四つの壁は、闘ぎ合いによって立っている。いつか、そのどれかが僕に倒れ掛かる。どれか？ どれ？
あれか？ これか？ どれもか？
どれもが、僕に向かって傾いている。
天井が落ちてきそうだ。
逃げよう。でも、どこへ？
電車を待つ。まるで靈柩車を待つように。

乗客たちは死んでいる。生きているという証拠がない。車内に臭気が漂う。その波線が確かに見える。向いに座った中年女が、僕を睨む。臭いの発生源は僕だとでも言うのか？僕が死んでいるとでも？

行く当てがない。結局、萌芽落花に墜ちる。

しかし……

しかし、だよ、なぜ、なぜ、造花を飾るのか。臭わないからか。

「あの、なぜ……」

「えっ？」

「いや、何でもない」

「はあ」

「あの、あれは……」

「どれ？」

「あの花」

「花？」

「いや、いい。もう、いい」

「花……」

指差した方向に、花はなかった。

もう、帰ろう。

でも、どこへ？

花のある部屋へ？

花のない部屋へ？

壁のない部屋がいい。

どこであれ、そこで僕は死んでいる。

潜れるのは棺だけだ。

いつからか、僕は死んでいたらしい。

ゆっくりと蓋が被さる。

21 蒸溜

真似しただけの天井に漂うのは中途半端な虚無
不在の行方を追い求めるふりのありふれた虚無
気のふれた触れ合いに溢れて振り返るふりの虚無
震えるままに目を開けば
だから
今夜も伸びすぎた異性の鼻毛を引き抜いて
「どこへ行ってしまったの、あなた」

安っぽく安らぐつもりで明後日の昨日をブルースに崩し
口笛

夜を真夜中から蒸溜して
私を眠らすか

22 たそがれのくにから
あなたがそうおっしゃるのなら
わたしはきわめて孤独です
おこたえしたくとも

嘔吐ですか また
きのうのアルコールがいけなかつたとでも？
あしたがあります あしたが
そのまま じつとして
<時間は彫像のように壊れやすい>

よびましたね ヒースクリフと
カタカナならカカオフィズでもよかつたのに
そう ぼくの名はだれにも にていない
なかでも あなたとは

おおきく口をあけてごらんなさい
死んだものの名は いまわしい
棺の蓋は呪文でしか ひらきません

よんではなりません！
あしたが 黄泉帰ります

23 水晶隠し
ほのかな
さざめきの彼方へと溶けてゆく夜
両手に痛い蝙蝠のはらわたを感じてみよ

ビタミンいっぱいの緑色植物を

嘔吐しつつ
嚥下する
オノマトペを駆使しても
釈迦の肉茎を断ち割った生き様という
サラミ・ソーセージを振りかざして
一旦撃ち抜かれた胴体とシノニム

かつて林立するペニスは母なる大地にゲバると
革命のあしたには母なる大地に戻ると歌われていた
そのように
二度ではなく 確かに三度
「かもしれぬ」を繰返すのだ

書斎に不似合いな応接三点セットが
熱苦しいいプロレタリアによって運びこまれた
としても
仏蘭西窓を
開け放てば それで済むこと
音と光と それから匂いが体躯を包み
しばしの恍惚に誘うのだろうが
しかし 飢えている者がいる
乾きさえ！

優しい朝の扉に よく撓る爪を掛けたのは
死にきれた蠟燭の肌の揺らめきのせいではなかった

私の命名した一篇の抒情詩に震えていたのは
つい先達てのこと

今は
もう
朝

24 懒惰な冬
冬は、僕のいる所からずっと遠くへ行ってしまった。

瞬間、僕を叱咤するのは冬のはずだった

ぬくぬく、おこたの中で、僕は嘔泣をした。

テレビの音の籠った部屋で、ことこと、菓缶がストーブに口説かれて耳元に熱い息を吐きかける。喉のあたりは、ひりひり、焼けつくようで、水を一杯と思うけれど、胃袋はぱんぱんで、何も受け付けてくれない。いつそのこと、何もかも吐きだしてしまったかったが、洗面所に立つには部屋がおとなし過ぎた。

窓を開けると、いい風。いい風以上には吹かないのだ。

多すぎるものを誰かに施したいと思ったが、これは誰かに恵まれたものだ。一人には多すぎても十人には少ない。

そんなこんなで、一番うまい手は、締め付ける丹前を脱ぎ捨てて、雪道へ逃げ出すことなのだ。

予定が決まった。

すると、ぼんやりしてきて、ぼんやりしていることだけは、はっきりしていて、冬が僕を引きずり出さないのなら、僕が自分を引きずり出そうと、思ったり考えたりするわけだが……

よいしょっ。

とか何とか、声にならない。

だったら、最初から眠ってしまえばよかったんだ。

そうそう。

お休み。

これでいい。

これでいい。

これが冬なのだ。

25 血痕

「あたしってこんなおんなよお」

と叫びながら

おそらく毛のない娘が深刻な三輪車の舞う大通りを走り抜けた

たくし上げたスカートの下は完璧な無防備で

二筋の赤銅色の血糊がてらてらと鮮やかだ

人々は感嘆の声を逆流させて

何も見なかつたように装いはしたが

夕雲がぐっと厚くのしかかり

土砂降りになりそうな静寂に救いを求めた

やがてざっとくれば

すべすべの太腿を連れて
あの子も結婚するという

26 甘味党宣言

だって みんなは
甘いお菓子が大好きよ
まあるく しゃぶって
まあるく なめて
ときには がりがり 噛み碎く
思いっきり 優しい 歯のない歯茎
そら！ 捕まえた
くるんだオブラートが崩れて溶けたら
そっと唾液に包むのね
だって
だって だって
そうじゃない!?

27 朝の約束

ガラス・ケースを粉碎しかけて君は夢精に目覚める。
あいつの残したタバコを吸う。
憧れていたオトナの味だ。
ピンポンパンのお姉さんに似ていた君はオルガン弾きになれなかつた。
乾いた瞳を擡げて呻く。
「先生、懺悔したいんです」
沈黙が静寂を追つ払う。
「あいつを先生に殺させてしまいました」
白墨を五本だけ並べたみたいな先生の指はぼきぼき折れて教室の隅に転がつていった。
生徒たちは藁半紙をくしゃくしゃにしてからじんわりと丸めた。
英語の予習がまだだった。
「あいつを殺したのは私だったのかもしれない」
時間に溶け込んで気軽になった君の言葉を私は笑つた。
「私たち、もうオトナだからね」
あいつとの約束があった。
優しい朝の約束。

「私たちはただ心地よいだけの風に化けるからね」
約束だけは守りたい。

28 回帰幻想曲

僕が踊るのは いつも
怪奇日食の夕べ そうさ
べちゃべちゃ くちゃくちゃ
ティー・パーティーが終われば
さっさと帰ることができるよ
あの孤独へ
なるべくこじんまりした部屋で
羽根の千切れた蝶を待つ君は優しい蜘蛛だ
怪奇な夜の
母胎回帰の幻想は
僕を二度と
美しい糸から離さないよ

29 完成しない土曜日

禁じられた欲望を放て
横転した郵便馬車から汗馬を解き放つように
嘶きは狡賢い時間稼ぎさ
届かない手紙のようにココアは
両手の中でゆっくりと冷めてゆく
干乾びた砂漠では
跳びながら遊ぼう
遊びながら忘れよう
そして忘れるために聞こう
この歌を

30 無限遠点あるいは代名詞に関する考察

私が安らぐことのできる唯一の世界、とげとげしい虚構の世界、つまり愛の夢の中で、
あなたは恐る恐る問いかける、私に。
「あなた……？」

完全武装の愛の兵士は無明から抜け出そうとして、誰かの影を見つけて怯える。
影が問いかけてくるからだ。

「あなたは……？」

闇が終わる前に、あなたは先に問い合わせなければならない。

急げ！

「あなたは誰？」

と、影が問いかけてきた。

もう遅い。

すでに淫らな代名詞を禁じた戒厳令が敷かれている。

代名詞の起源は所有格だから、主体は無限遠点に監禁されたまま、世界の終末を待つしかない。

どの世界で？

31 歩く日

ある日

ある時

歩き

つつ

あの日

あの時

歩き

つつ

あくる日

飽きる日

歩き

つつ

来る日

去る日

歩き

つつ

32 少年讃歌

雲形の雲は一天を滑り、夢は盲いて久しい。拡大された玩具の神殿の締め切った門前で野犬は交尾し、窮屈な洋装の衛士がピアニストの睫毛のような有刺鉄線で彼らを鞭打つ午後、あの少年は眼底の痛みに耐えかねて立ち止った。

陰部の結合以外に連関の術を知らないやつらの眼球が鉄の光彩を放ちながら剥き出しになり、禁忌の強制を企てる家畜人の眼球も押し出されて転げ落ちそうだ。

——誰か、いる。そして、僕を数えている。

ギャッ！

走れ、命のぎりぎりまで剪定された針葉樹の下へ。

吐け、黄色の芝に枯色の胃液を。

鋭角の速度で遠近法に絡め取られた今、奮勇を振るって身を竦めよ。

33 アンノン

あのさ、何か、面白い話、ないか？　ないよね。あつたら、こんなところで愚図愚図しないし、どつか行く……。そうそう。知ってるかな、アンノン？　萌芽落花の常連なら、誰でも知ってんじやないの？　えっ。安藤さん？　はあ、そうか。そうかも知んない。穴太さんかな。じやなくて、阿野さんか。へへへ。へえっ？　何、何？　おいおい、しつかりしてくれよ。起きてるかい？

姓がアンで、名がノンかな。逆に、名がアンで、姓がノンだったりして。ニックネームかな。かもしんね。アンノウン？　へへへ。

あの、その、ええっと、アンだが、ノンだかが、座ってんだよね、よく、隅っこの方。いるんだか、いないんだか、よく分かんね。変な雰囲気でさ。

カップと受け皿みたいなもんだよ、アンノンと萌芽落花の関係は。セットなんだな。どっちが受け皿かって、そりやあ、決まってんじやん。決まってない？　ああ、そうすか。失礼致しましたと。

壁側が長いソファで、テーブルは一人用だろう？　ていうか、二人用だね。三人、四人で来たら、テーブルをくっつけてくれる。だもんだから、逆にさ、離れてると、今にもくっつきそうな気配ってあるじやん。あれがいいって人もいるけど、いやって人もいるよ。おいら、やだな。どっちかつつうと。

でき、あるとき、気が付いたら、斜め前に、ふわっといたんだよ。そうそう。ふわあつとね。

人の印象ってさ、大体は着てるもんで決まるよね。違う服でも、何となく似たようなもん着てっじやん？　髪型は決定的だよね。腕時計は、まず、同じ。変わらない。眼鏡は、印象が強すぎるから、かえって役に立たない。すぐに変えちやうしね。

アンノンの場合、そういう特徴みたいなもの、皆無なんだよね。年齢、性別、ともに不詳。痩せてるか、太ってるか、よく分かんね。姿勢が悪いんだ。こう、丸まってる。背の高さなんか、もう、てんで……

でき、語り出したんだよ、あいつね。向かいには誰もいないんだよ。でも、顔は正面、向いたまま、だらだら。ほら、よくあるじやん、目の前に猫がいてさ、「かわいいね」かなんか言うとき、猫に言ってんだか、傍にいる誰かに言ってんだか、ちょっと分かんないって、そんな感じさ。

いやいや、独り言じやない。違うって。そんなじやない。

譬えるなら、アンノンのカップとおいらのカップが繋がったみたい。糸のない糸電話だね。そのありもしない糸を辿って、砂糖壺から発生した仔馬が砂糖の粒を、ぶるぶるっと払って一度だけ嘶いてから、駆けてくんだよ。

*

もう死んじやったんだけど、私達のおじいさん。彼には瘤があったの。ほっぺじやないよ。背中だよ。でも、私達は見えないふりしてた。大人たちに話すと、「そんな物はないぞ」って冷たくあしらわれるから。驚いてもいないし、暗に叱ってんでもないんだ。

私達は彼のことを「ノートル」と呼んでた。彼は「ノートル」の意味を知ってたけど、知らないふりしてた。そういう可愛い人だったんだよね。ふふふ。

(そのとき、怒りっぽい孔雀みたいな客が入ってきた。ギンギラギンのロング・コートの前を広げ、くねくね、歩く。誰かを探しているみたいだ。その誰かは、すぐに見つかって、鍔広の帽子を取って振った。アンノンは、数秒間、眩しそうに目を細めた)

何の話だっけ。古風？ ああ、瘤ね。誰の？ 誰でもいいのさ。どうせ死んじやったんだもん。ノートルが死んだわけ？ 知らないよ。誰も教えてくれなかつた。知りたくもなかつた。

(アンノンは田舎者のココアをずっと啜った。話の続きを考えてるんだね。思い出しているのかもしれないな、古い作り話を)

私達は、彼がよそ見をしている瞬間を狙って、くすくす、笑つたの。そういうゲームなのよね。おかしなことに、それに彼も参加してたの。笑われそうになると、ふっと横を向いてから、さつとこっちに視線を送るの。くふふ。

私達は彼の体を笑つたんじゃない。という、そういう嘘を共有していたんだね。でも、本当は、彼が《自分は体のせいで笑われているんじゃない》というふりをすることが、私達にはとっても滑稽だったのね。

そもそもさ、〈自分で自分のことをちゃんと知っている〉みたいな人って、おかしいよね。まるで酔っぱらいだ。ほぼ死んでる。ノートルは、生きてるうちから死んでたのさ。

私達は、笑いをこらえることができなくなると、走り出したよ。走つて逃げた。走りながら笑つて、笑つて、涙が出るなんて、しょっちゅうだった。息切れがして、立ち止つて

俯く場所は決まってた。そこを私達は〈笑い場〉って呼んでたよ。廃墟にぽつんと残っている井戸の前なの。

すこし大人びて、私達はつましやかなお詫びのテクニックを覚えたの。実存的偽善ね。〈瘤〉とは言わず、〈突起〉と呼んだ。それが人に知れると、〈塊り〉とか、〈肉〉とか言って、それもすぐに知れ渡ったから、最後は〈体〉よ。〈体〉と呟くだけで、もう、笑いが止まらなくなる。カラダ、カラダ、カラダ。はははは。今でも笑える。

笑うと大人たちが変な顔をする。だから、丁寧にお辞儀をして、ほんの数秒間、頬を赤らめて見せるのよ。数秒間よ。長すぎたら駄目なの。お芝居だって、気づかれるから。ううん。お芝居だってことぐらい、誰だって知ってたよ。お芝居じゃないみたいに気を付けるために、数秒間が肝腎なの。一瞬だと無視される。

何もかもがお芝居だって、ノートルは知ってた。知ってても話題にはできない。そのきわどい感じが、とにかく、もう、笑えた、笑えた。

彼が死んだ朝というか、彼の死体を見た朝も、私達は必死に笑いをこらえ、笑い場まで駆けたよ。だって、嘘なんだもん。彼は死んじやいないの。死んだふりしてるだけ。大人たちも、深刻そうな表情を拵てるだけ。

もともと、死んでる人が、どうして死ねますか？

(アンノンは、しばらく、話せなくなつた。泣いているようだが、笑っている、声もなく。息が苦しそう。涙が目を濡らしたが、流れ出ることはなかった)

尻を洗うとき、ちらっと見えたんだけど、彼の背中はすべすべだったの。うわあ。騙された！ 私達の負けだよ。

口惜しいけど、さらに笑ったよ。

ノートルは、何もかも知つてたんだ。彼は私達を騙すために、毎朝、背中に袋を詰めていたのね。その様子を想像すると、もう、おかしくて、おかしくて……

*

どうやら、THE END らしかつたんで、ちょっと気になつていてみた。

「さっきから〈私達〉って言つてるけど、兄弟とか、いたんですか？」

アンノンは、聞こえないふりをするために、ほとんど残っていないココアを啜つて見せた。それから、不思議そうな笑みを浮かべて壁と天井の境あたりに視線を向けた。まるで宣戦布告みたい。じやなきや、プロポーズかな。

「別に意味はないよ」

「えつ」

アンノンは消え入りそうになつた。私は投網でも掛けるように続けた。

「兄弟じやなきや、姉妹とか？」

「安穏のためよ。一人称単数って、なんか、危なつかしいんだもん」

むかついたね。すると、アンノンの姿が消えててしまいそうになった。おいらは平手打ちを食わせてやったぞ。冴えない音が音楽を掃きだすほどに響いた。アンノンの体は、恐れと喜びに震えている。汚い。

いつの間にか、店の外にいた。

ドアが後ろで閉まった。

短い階段を上り、空を探した。

太陽。

眩しくないけど、暑かったよ。

34 月

夜の隙間から覗いている人に気づいていましたか

急激に振り返っては焼けた石を星のない夜空へ投げ上げていました

そのころ月は転寝をする老嫗の喉元に向かって元気よくブランコを漕いでいました

35 帰郷

汚れた壁に去年の暦が掛かっている。

「ところで、これからどうするつもりだ」と父が言った。

縫物をしていた母は黙って立ち去った。

古い畳の縁に新しい針が一本落ちている。

「どうにもならないか」

私は、父を見ず、針を見ず、汚れた天井に顔を向けた。

「いや、どうにかなりますよ、きっと」

母が古い盆に新しい何かを載せて戻って來た。

「ふんっ」と父は笑った。

私も笑った。

母が遅れて笑った。

*

誰にも言うなよ。針が落ちてんだ、畳と畳の間の細い溝に。

初めは……。はあ、何が始まりだかね。

玄関の引き戸ががらがらと開いて、御袋がちょっと驚いたような、踊りたいような顔をして、出ようとして引きながら、顔だけ残して、肩を引きながら、「おとうさん」と呼んで下がった。「おとうさん。帰って来ましたよ」

親爺の唸り声が奥からした。響かない。「うほ」

門前払いは食わなかった。どちらかというと、食わされたかった。

俺は少しためらいながらも、ためらうのは逆に変だと思い直し、いや、こうなることは予想していたから、予定通り、玄関に踏み込み、廊下に背をむけて、背を丸めてしゃがんで靴を脱ぎ始めた。

もう、止めよう。話が長くなるばかりだ。全然、面白くないよ。気になる？ へへへ。そうかい。

靴紐を解くのに手間取る。そう。時間稼ぎのために登山靴を履いて来たんだ。御袋が奥へ下がり、親爺の足音が近づく。ひょこひょこ。「まあ、上れ」

「お茶でも淹れましょうかね」

女たちは台所に逃げる。男たちに逃げ場はない。

誰かががゆるゆると離れる気配を感じて、俺は靴を軽く蹴って、親爺の下駄をぐっと踏みつけてから、我が家に侵入した。

天井を見上げる。初めて見たような気がした。もっと高いと思っていたんだ。低くて息苦しい。

へつ。つまんないよな、こんな話。

卓袱台に盆が載っていて、茶碗も載っていて、三つ。で、渋茶が注がれてゆく。

俺はこの卓袱台が嫌いだったのだ。これを破壊する勇気がなかった。その代りに別の何かが遠くで壊れ、俺はこの家から連れ出された。ところが、そのせいで、この家は固まつた。御袋が俺を見て笑い、親爺を見ると、親爺は笑い返した。

御袋は、俺の服の鉤裂きを見つけて、裁縫箱を持ち出した。かぎ裂きの理由は訊ねない。俺は渋茶を啜った。この茶が嫌いだった。

縫い終わると、針が針山に向かった。すると、親爺が用を言いつけた。俺と二人きりになるためだ。御袋は察して、素早く立ち上がった。そのとき、針は針山に刺さらず、裁縫箱の縁を滑って畳に落ちたんだ。

親爺は賢そうな話を始めた。俺は頷いてみせた。視線が針に向かわないように気を付けていた。

親爺の声が途切れた。御袋がやってきて、腰を下ろしながら、「ねえ」と俺に言った。「はあ」と俺は受けた。

幼いころの罪を思いだした。夜、歯を磨かなかつたんだよ。わざと磨かなかつた。罰されるのを恐れながら眠りに就いた。翌朝、目が覚めても寝床の中でぐずぐずしていた。御袋がいつもと同じ口調で起床を命じた。卓袱台に向かうまで、罰は受けなかつた。朝飯を食べ終わるまで、裁判は起こされなかつた。家を出るまで、判決は下されなかつた。帰宅しても、罪さえ知られていなかつた。俺は却って妙に恐ろしくなつた。ちょうど黴が蔓延るみたいに、借金が雪達磨式に膨らむように刑が重くなる。そんな気がしたんだよな。

針が親爺を刺せばいい。御袋を刺してくれ。針のことを忘れたら、針は俺を刺すかもしれないよな。

御袋が、昔、よく言ってたんだ。「折れた針が体に刺さると、それは血管の中をぐぐつと通って、いつか、心臓を刺すんだよ」

ふふ。

楽しみだな。

本当に黙ってろよ、針のこと。えっ？ 誰か、聞いてるって？ 誰？ 隅っこ？ いな
いよ、誰も。ふん。伝説のアンノンさんかい。本当はあんたなんだろう。なあ、安藤？

36 航海日誌

思いを乗せて運ぶ船、羽根、春、遠い春、昼、夜、酔う。

赤い風を孕む緑の帆の伝馬船の優しい船首に立とうよ。

そして海の青さを青空と言いくるめようぜ。

そして天水桶から飛び出した白衣の娘の腐り始めた尻の肉を噛もう。

そして死んでいる愛犬の首輪を僕の首に締めてやろう。

代りに腕時計を潰して濁った海に投げてやるのさ。

人体を時限装置だと誤らないためだって。

母港に向けて出帆しながら「いつか旅立つ」と電報を打ちながら……

(中略)

今朝ようやく気付いたのだが、衣服はあまりにも普遍的だった。

37 かくて

顔は良くても

か弱くても

可愛くても

乾いても

画いても

勝手も

糧も

鴨

38 青空の意味提唱 Imitation in blue

ぞくぞくする悪寒の予感のような十字路に足音もなく近付いてくるあの人のような真昼の
眉月を見つけたときのような金曜日の午後

両手に抱えきれないたった一冊の哲学事典のような滑稽かつ悲惨な後ろめたさのような満

ち足りた忘却の破戒のような金曜日の午後
利き足だけでぴょんぴょんと飛び跳ねているような模倣の更なる模倣のフランス・デモの
ような丼一杯の血糊のような金曜日の午後
まるで明後日の方から昨日が降ってくるような御清潔な私共の暴力追放のようなエレキ・
ギターの古臭い悲鳴のような金曜日の午後
青空のような温かい御支援に守られて
初めての金曜日の午後
二十一歳の

39 新しい模倣

さあ

ページを繰りなさい

そこには杏の落ちていることがあります

紅く

五月にお別れしてから またお会いするまで
あなたの腕は円く輪を作り
脱臼しています
私はあなたの輪を利用して
あなたの関節を否定して
あなたの紙袋を受理して
古い宗教を演じましょう

幼げに整えられた無彩色の果樹園で
あなたの杏色に塗った爪は
丁寧に韻を踏むようにして立ち並び
あなたの靴は世界中で育まれている針葉樹の葉先に爪先立ち
よく訓練された盲導犬のように様式を復誦して
あなた自身を模倣しなさい
私は私の傷付いた手首を隠蔽しながら
あなたの全身をあなたの影に塗りこめましょう
紅く

さあ

ページを繰りなさい

あなたの内臓で幾度か嚥下されてきた陽射しが
ゆったりと立ち返る朝まで

40 紛い物の夜

紛い物と気付いたからか、反射的に手を引いていた。痙攣する金盤に同心円状の不安が広がる。待ち構えていたように、微温湯はルビーの、そう、紛い物のルビーの指輪を飲みこんだ。水の中を探れば、不安は爪から指、手、手首、肘、肩、そして、ついには全身を引き摺りこんでしまいそうだ。

底なし。

浴用石鹼を泡立てて水面をそっと撫でる。白い泡がゆっくりと広がって、真実を覆い隠してくれた。

遠い夜汽車の汽笛が届く。

帰って来るの？

「紛い物だけどさ、これ」

箱も何もない、裸の指輪を摘んで差し出しながら、あの人は照れ臭そうに言った。

(嘘だよね)

嘘だと思いたかった。

支えるものを失った銀色の尊が、閉じる合図みたいに輝いた。きらつ。一瞬、薄雪の寒さを感じる。洗面所が冬になった。数本の爪が花弁を掴み損ねた尊になって凍りつく。この冷たい水の中に手を沈める勇気が湧いてこない。自分の肩を両腕で抱いて震えを止めようとしたが、肌は粟立たず、人を斬った後の刃が保つ僅かな熱が身内をよぎった。だから、「寒い」と呟いてみる。

嘘は温かい。

「寒い（私はこんなにも寒いのだ）」

声にしたら、寒さは消えていた。言いわけでもするみたいに、魔法瓶の湯を注ぐ。どぼどぼ。泡のバレリーナが盤の底から日課のレッスンをこなすように舞い上がる。落ちてゆくときの紛い物の美しさとは大違いだ。私から離れていくときにだけ、輝く、すべてが、いつだって。

「紛い物だけどさ」

本物だと思った。思いたかった。

玩具を取り上げられた幼児みたいに泣き喚く気にはなれなかった。少女時代に綴った愛の物語を読み返すときの恥ずかしさと嬉しさが蘇る。男が耳元で囁いた「愛」という玩具を、本物だと思ったかった。その思いが懐かしい。

点けたばかりのライトを消して寝間着に着替えると、寝間着に着替えたばかりの娘が目を覚ました。

「あの指輪、欲しかったのよね。あげるわ。でもね、落っこちたの、石が。拾つたら、あなたのものよ」

指から指輪を抜き取り、枕元に置く。娘は手を伸ばして摘み、自分の指に嵌めて眺める。小指から薬指、中指、人差し指、そして、中指で落ち着き、ぐっと肘を伸ばす。

「まだよ。石を拾つてから」

指輪は抜き取られ、枕元に戻る。

母は椅子に掛けて、娘が戻るのを待つ。どうせ、捨えやしないわ。

今夜は雪が降りそうだ。朝、金盥に氷が張ることだろう。その氷をバリバリと割っている自分を想像する。

夜行列車の汽笛を聞いた。二度目だ。三度目が聞こえても、娘は戻らない。娘なんか、居なかつたみたいだ。

41 食物

君には渡せない この塩辛は
永遠の食物だ
君が宇宙の真ん中に置き忘れたり
君に菓食わせたりして
小骨のように思われたくないから
この永遠の食物は
私にとってお茶漬けの友なのだ
おお 友よ
永遠の友よ
物質の第六体よ
君の腐り具合に関する研究はとっくに放棄した
永遠に進化しない友のためだ

塩辛の内情には海が漂う
海の内郭には塩辛が潜む
永遠の処女である梅干し
もしくは 夜明けの海を見ていた梅干し婆は
塩辛を愛したという
耳に胼胝の伝説だ
生命が有限であることの奇蹟を知らしめるために
干乾びた臓物主は海と塩辛を産んだ

永遠の食物 塩辛は
君と私の別れの朝に

42 単なる消化器の問題

たとえば人妻を愛してしまった午後
あるいは たとえ話を聞き飽きた午後
色がない
音がない
匂いもない
凝固した血液ではない
黄色の木馬は天翔けるぞ
ふわふわふわふわ
誰が死なせた僕だ
ふわふわふわふわ
ああ 目玉焼き
半熟で
もっとも消化にいいやつ
それをおくれよ
僕は 午後 胃を痛めております
緑色に
臭い 臭い ああ 臭い

43 ジャニスが死んだ朝

ジャニスが死んだ朝、僕の脚は虹の向こうまで長々と伸びていた、一本だけ。
「ニクタイってさ、憎い袋って書くんだって、知ってた？」
そんなことを言葉にするつもりはなかったんだよね。
にやにやしながら隣を見ると、誰もいなかった。一安心って感じかな。ちょっとした不満は安心に似ている。だから、また眠った。
小さな危険と大きな危険を足して2で割って……
コツコツ。
虹の彼方から、誰かがやってくるらしい。ご苦労なことだ。
煙草を探す。煙草と枕の間に銀色の折鶴がいた、二羽。それを重ねて、百円ライターで火を点けようとした。長い髪が何本か、灰皿の中で丸まっていて、それが先に燃えた。炎は、ついでに僕の手を焼いた。あっ！

トントン。

身を起しかけて、頭痛と吐き気に襲われた。

トン、トン、トン。

「工事中かな？」

いないような、いるような人に聞いてみた、口の中で。

ドンドンドン。

音源はドアだった。

ドカン、ドカン！

「ふわ～い」

「開けなさい。警察の者だ」

反射的に窓の方を振り返った。いや、無理だろう、飛び下りるのは。ここは二階だ。

ドアの向こうで刑事が笑った。

「俺だよ。俺」

何だ。庵野さんか。勝手にドアを開いて入ってくる。

「ワリイ、ワリイ」

言葉と違って、悪そうな表情はしていない。きょろきょろ、部屋の中を見ている。一巡して、僕の目を探し当てた。退屈なテレビ・ドラマの一場面みたいだ。欠伸を噛み殺す。

「眠そうだな」

「うん」

「もう、昼近くだぞ」

彼は焦げた折鶴を見つけた。僕はそれを握りつぶして屑籠に落とした。彼は伸びをするふりをして目を逸らし、屑籠を見た。誰が折った鶴か、見当が付いたらしい。だが、すぐに漫画雑誌を発見して引き寄せ、ページを捲りながら、どっかと座り込み、空咳を落した。

「でさ」

「うん？」

「ははは。面白いよね、これ」

「ああ。うん」

「うん。うん。うまいよ」

僕が何本目かの煙草を銜えたとき、彼は自分のために擦って消しかけたマッチの炎を肩のあたりからゆっくりと近づけて来た。おもちゃのピストルみたいだ。

「どうも」

答えず、彼は胸いっぱいに吸った煙を天井に吹きかけた。

まあ、限界かな。

「眠い？」

言葉と声が合っていない。どちらに応えればいいのだろう。どちらにも答えるか。だが、さて……

「帰っちゃったよ、彼女」

反応は即座だった。

「ふつ」

笑いながら煙を吐く。

「昨夜は、どうもね。調子狂っちゃって」

僕の台詞ではない。

「勘定は？」

「いいんだよ」

「そう。悪いな」

「いいんだよ」

「いくら？」

「いくらだと思う？」

意外に安かった。

「そうか。もう、あそこじや、あまり飲まなかつたもんな」

「そう。みんな、ぐでんぐでん」

時間稼ぎにも限度がある。静かさが再び室内に滞った。待ち構えていたようにサイレンが通過する。

「彼女、大丈夫かい？」

「さあね」

「無気力、無関心、無責任」

「はっはっはっ。無教養ってね」

互いに無表情で、数秒が経過した。それが何分にも感じられた。

立って窓を開けに向かったら、背中に何かを感じた。潰れたホープの箱が落ちている。

彼が投げつけたのだ。中には、まだ数本、残っているようだ。

彼は雑誌を捲りながら囁く。

「御帰還あそばないんでね、事情聴取に参ったのでござるよ」

「あれれ」

やっと彼の顔を正面から見る余裕が生まれた。

「実は、今まで眠ってたんだ。お客様がいつお帰りになったのか、知らない」

「そういう奴なんだよな」

「水臭い」

「酒臭い」

「ははは」

「へへへ」

そこらに物証でもないかと、彼が目で探し始めた。僕の笑いが許可を与えたことになるらしい。僕は拒むように、よそを向いて呟いた。

「今頃、ココアでも抱え込んでんじやない？」

「いや、行ってみたんだよ、萌芽落花には」

僕は胃のあたりに変な痛みを覚えた。

太り気味の彼の体が丸まっている。小さく見えた。抱いてやろうか。そして、「愛しているよ」とでも言ってやろうか。ぶるる。

「もう戻ってるって、きっと。で、飯、食ってるよ」

「犬ころみたいに言いやがって」

「可愛い犬ころだね」

彼は、わざとらしくにやけた。

僕は、ちょっとむかついた。

「着痩せするタイプなんだね」

長い沈黙は滑稽だが、勝負だ。

「で、寝たのか？」

待ってました。

「うん」

嘘だ。いや、丸きりの嘘でもない。記憶がなかった。しかし、そんなことを言つたら、彼は侮辱されたと勘違いすることだろう。

彼は爆笑した。私もつられて笑うふりをした。ふりだということが分かるように肩を、ぴくぴく、上下させた。

昼飯を食べてからビア・ホールに行こうと誘われたが、腹具合が悪い。本当だ。断つた。彼が出て行くと、蒲団の上に仰向けになった。苦しい。頭の中で、彼との問答がエンドレス・テープのように繰り返される。苦しい、別の意味で。

這つて小さな蓄音機に近付き、スイッチを入れた。針を置いたままになっていたレコードがゆっくりと目覚める。

ジャニスが歌い始めた。

「あたしは、自分の内面の犠牲者なんだよ。感受性があたしをいつも、とても不幸にした。どうすればいいのか、ちっとも分らなかつた。でも、今じや、その感情を、あたしなりにどう扱えばいいかってことを覚えてしまった。あたしは感情の塊でいるくせに、それからの解放を望んでいるんだから。

どうしてだかわかんないんだけど、ただ、できるだけ感じたい。かしこいことだとは思えないけど、そんな理屈なんか超てるよ。だから多分とてもかしこいことなんだ。それこそ〈ソウル〉ってことだよ」（デヴィッド・ドルトン『ジャニス—ブルースに死す』）

僕は、初めてジャニスが死んだことを認めた。そして、袋小路に入った気分になった。ジャニスがいない世界で、僕は、もう、あまり生きられそうにない。

しかし、メランコリーは、突然、去った。

きっと今頃、あいつら二人でサンドイッチか何か、ぱくついていることだろう。73回転の、雑音だらけのレコードが回っていることだろう。そして、庵野さんはノートを手にして、誰かの詩を朗読していることだろう。

「君達は包囲された。ハモニカを捨てろ！」

ちょっとばかり、わくわくしてきた。

というのも、屑籠の中に使用済みのコンドームを発見したからだ。

44 酷寒

ああ わたくしはおまえの谷間へと雪崩込む一握りの石炭殻だ
おまえは一度だってわたくしの母であったことがあったか
風ではなく 葦笛のように
おまえは飛ぶ鳥を真似ている
飄々と
わたくしは小指を立てる
おまえは人差し指を
あはは 鬼だ 鬼だ
一度も聞いたことのない協奏曲にかぶれたおまえは
わたくしを産み直す 何度も 何度も
おまえの父は遠い北国の荒れ地を耕している
わたくしの父は遠い北国の荒れ地のようだ
別の季節 冬ではない季節になれと
おまえはわたくしにねだる
だが わたくしは おまえの父にはなれない
そして おまえは わたくしの母になれない
おまえは おまえに似た娘を欲しがっている
その娘は 水車小屋で春を待つ
折り目正しい娼婦だ
娘は 紙幣のような愛をねだる
世界中で通用する紙幣のような愛を
それは 腐った紐帶だ
ああ わたくしは耕すことを知らない農夫だ
夕暮れには おまえの背にしがみつき 家路を辿る
「お家が どんどん 近くなる 近くなる
今来たこの道 戻りやんせ 戻りやんせ」

45 デンポー

ボクタチワモウトモダチデワナイノダヨ
ボクタチワモウトモダチデワナイノダカラ
ワライナガラボクノホホヲタタイテワイケナイヨ
ボクタチノホソイカイナワコイビトドオシノヨウニムスバレテイナイノダヨ
キミニワモウタッタイツポンノウデサエナイノダヨ
ウツクシクグモルヨウナコエデ
きみのことがすきだよ
ナンテイツテミタイボクワマダココニイルケド
キミガソウイワレタガツテイルカラダヨ
ホホエンデルネ
キミワシツテイルンダ
ボクタチワトモダチデワナカツタノダヨ

46 夕闇

ぶよぶよの四辺形は
円錐形に接する
ト措くと
うんこしたくなるね
美しい日本のふるさととやらは
慢性カタルでさ
ええっと
ねえ 君
ちよいと そこらを歩かないか
お知り合いになりたいから

47 バラを隠して

ぼくたち 少年少女は 未来を信じます
今日という日を直視せず
昨日という日を回顧せず
未来という日を透視します
誰もいない荒野に腹這って

虎狼のような叫びをあげません
ぼくたち 少年少女は 爆弾を投擲しません
爆弾の軌跡を優しく氷漬けにした薔薇の花束を運搬します
僕たち 少年少女は 花束から抜いた薔薇の花を一輪 携帯します
見えない薔薇の花を

〔薔薇携帯に関する規定〕

- 1 この薔薇は少年少女にのみ携帯を許される。
- 2 この薔薇を他人に譲渡することは許されない。
- 3 この薔薇を紛失した場合、少年少女の資格は剥奪される。
- 4 成人後、この薔薇は枯らさねばならない。
- 5 この薔薇の有効期限は一季節とする。
- 6 少年少女は薔薇を隠して歩かねばならない。ちくちく、バラは痛いけど。

48 詩の死

釣れるのは 腐乱の深海魚
水色の瞳
折れた牙
いつからか
街路は 点ではない
人間は 線ではない
卑猥は 面でも
詩心は 立体ではない
小火はあったさ
流し目もあったよ
ちょっとした酒盛りがあつて
ちょっとした腹切りがあつて
ちょっとした聖者の行進もあった
主婦たちが自転車を漕いで走る
必死の形相
急がねば
急がねば
死んでしまう
死んでしまう
魚屋に並ぶのは 死んだ深海魚ばかり
煮るのかね

焼くのかね
まさか生で
いらっしゃい
へえ
売りきましたよ
生きた詩は

49 無限包容

かつて暗闇に迷う者がいたとでも言うのだろうか
一杯の白湯を冷ますようにして君の息吹は証した
証明不能を

足のない少女を片方の肩に載せて君は笑ったではないか
素戔鳴よ
君は知っているね あの伝説を
二度と振り返ってはならぬとか
同じ道を往還して三度目に竦めとか
影のような汚泥を渡れとか
ただひたすらにぐるぐると舞い廻れとか

君は子孫だから
愛に呪われている
愛が一つの果実ならば
それは奇妙な果実だ
笑みを張り付けた愚者の
顔に掛かる髪一筋に
ぶら下がる果実だ
漆黒の

50 自嘲

銀の葉の他に
君を見出す術があろうか
夕暮れに盲いて蹲る家禽を抱く他に
私を許す術があろうか

51 訂りの洪水

綿飴が溶けかかる路上
だらだら
訛りの洪水
笑うと歯茎が見える
そろそろ
金のありがたみがわかつてきて
ぞろぞろ
寄せては返す
羨みながら
羨ませながら
準備中の
匂いだけ漏らして

52 生臭い

転落
目立ちたくない
放水
御冗談を
淫欲
あるいは
傷害保険
爽やかに生きて
瞑目
そぞろ
羨ませながら
そぞろ
羨みながら
生臭い
食中毒とか
その他いろいろ

53 あなたが欲しい

見世物小屋の看板娘が
疲れぬ夜を痛みのように思いだす
そのままに
世界と
あなたが欲しい

54 モーニングセット

賽銭箱の驚きようつたら なかつたよ
鈍い光を放つ始発真空行き鈍行列車の
永久メッキは剥げた
準備中の札がぶら下がるばかり

55 銀幕の寓話

一 青い棘

鬼より怖いと噂されるドモヤスが「どどっ」と吃って秘書を斬った。
時価ウン千万円という噂の宝石〈青い棘〉を盗もうと決めた夜のことだ。悪事を働く
とすると躊躇う。だから、その女々しい気分を切り捨てるために、もっと悪いことを先に
しでかす。だから、秘書を斬った。

秘書の机の上で銀色のシガレット・ケースがオルゴールのように厭味ったらしく開いた
せいでもある。

オルゴールの可能性も計画に入れておかねばならない。それと、いつも乗る私鉄の駅の
数もある。鈍行の停車駅から急行の停車駅を引いて、身の上心配ある故山上と掛けて、に
んまり。千円から特急券の料金を引いた数と等しいのである。釣銭が三百六十五円とは洒
落ている。では、たまには帰省してみようかなどと、あらぬ方向に思念が怯えた兎のよう
に走った。

加えて、足長のかつての恋人というか片思いの彼女の処女性を疑ってみる。現在はトマ
ト・ジュースのマリーと呼ばれ、立派な娼婦として活躍中だ。彼女に、「早速逢いたし」
と電報を打つために歯医者を訪れ、前歯を三本抜いてもらった。

どうやって、そこへ？

魔法瓶の底に長いこと仕舞ってあった紅色の軽気球に飛び乗って、である。

風が滝のように下る夕暮れだから、気球は断然勇ましく出立できたのだ。八十日間
かそこら、下宿のあたりを一周の後、うまうまと〈青い棘〉の奪取に成功したと、新聞
は、そう報道した。

その間、ドモヤスはアパートの一室から突っかけを履いて、古びたジーパンのポケットに両手をぐさっと差し込み、口笛吹き吹き、廊下を歩いて便所で小便を垂れて戻っただけなのだ。

嘘のような嘘の話が嘘のように歩き回る。そんな噂を、君ら、信じるか？

犯罪は常にバーゲン・セールの夜明けのように、あるいはLサイズのコンドームを常用する短小男のように、あるいは、ええっと、何だっけ、ありふれた比喩だが、買ったばかりのネクタイのように、春風に靡くものなのだ。

そんなことも知らないで、生きて来たの、今まで？

独り言。

易しくそっと撫でさすれば、秋空だって落ちてくるのさ。

独り言。

そんなことも知らないで……

ドモヤスの企みは極めて難解だったので、思いもよらぬほど、すらすらと事は運び、我ながら照れ臭くて、成功を疑いたくなつたほどだから、耐えかねて、水銀のような呻き声を上げながら、ついに吃り方を忘れてしまった。

ドモヤスは、〈暁の饒舌少年〉と改名し、鋼鉄の吃音でリズムを刻みながら、ヘビー・ペッティングに苛立つ処女たちを、さらに苛立たせて稼ぎまくった。

人生の明るい裏街道を垣間見てしまった少女は、今更マリーとは名乗れず、ヤス、ただのヤスの前で別人のふりをした。足元で蝦蟇が唸る。

知つて知らぬふりのヤスは、おどおどしながら、「君、どこから、どこへ？」と尋ねてみる。実は、この偽装工作こそ当局を過剰なまでの混乱に陥らせた第二の原因だった。ヤスの左手は満員電車の中で老女の和服の胸に突っ込まれている。この老女は完璧な処女であったばかりか、海に潜っても陰毛一筋さえ濡らさない小笠藻流マクベス夫人だったので、「まあ、きれえ」と微笑んでしまった。

肉襦袢が何色だったか、確かめる暇もなく、ヤスは慌てて感情的に環状線に乗り換え、ぐるぐると旋回し続けた。孤独と絶望の終わりのない退屈。

そんなこんなで、吃音が蘇り、気がつくと、青い棘が……

前歯が二本だけ、青く光っていた。

彼に何ができようか。

「お医者様、ありがとう。今度からは、痛くしないでね」

こんなことしか言えない。

「これで何でもおいしく戴けそうです」

こんなことしか言えない。

独り言では吃らない彼も、外階段を上りながら息切れてしまい、生きる限界を知つたつもりになれた。あくまで、つもり。

完全犯罪は誰の目にも明らかであったのにもかかわらず、官憲はちっとも動かず、ドモヤスは野放しなのだ。

独身女が何日も着古した下着を白旗のように干し続ける夜、ドモヤスは殺意を殺しながら、よたよたと出歩いているのに、偉そうに、近頃では麻薬的犯罪の香りを垂れ流す民放各局のワイド・ショーで、ひ弱な僕たちのために人生相談を担当している。

二 爆弾紙風船

「ある種の自由は狂気の異相である」とは、まことにまことしやかなまことであるのかかもしれない。

「確かに、ラブラブの狂喜乱舞は凶器に似て、あるかなしかの爪染草だが、それを言うなら、こんな話から始めねばならない」と、私の古い友人、というか死んだ友人、というか、私が生まれる前に死んだ見知らぬ鉄人が、匿名で次のように送信してきた。

ある日、ある老嬢が「私は人生のあらゆる苦難に軽々と耐えて来た」と軽々しく宣言した瞬間、どこかで爆弾紙風船が破裂したとき。

赤と白と鉛色の段だら縞の紙切れが舞い散る中、誰かが「ごめんなさい」と歌い始めた。「踏ん付けちやった」

この儚い出来事は、謝罪が趣味の女秘書がまだ斬られる前に「御婆様からよく聞かされていました」と、しつこく繰り返し損ねた昔話に似ていたのかもしれない。

証拠はない。

この昔話は女系一族の族譜に該当する。

証拠はない。

母も聞いた。叔母も聞いた。祖母も聞いた。先祖伝来なのだとさ。

なんとなればだ、彼女たちこそ爆弾紙風船の異相としてのみ名を知られていたからだ。

段だらの人生。段だらの交際。段だらの家事。段だらのこじつけ。この段だらだらけの世の中で、段だらでなくて、どうして生きていられよう。

閑話休題。

林の中の木漏れ日のような瘦古たる傾向ではなく、ある狭軌の線上の衰退が銀幕への指向を偽装するときのように、彼女は紙風船を愛していたとき。

だからかもしれないが、対象を喪失してもなお持続する愛が導火線となった。自分で踏ん付けたんじゃない。

いや、同じことか。

船頭が川面を鏡に使うのに似ている。

とはいえる、彼女の髪が銀色に変わる前に銀幕が彼女を取りこんだことは、歴史的事実として噂されていたのだった。

要するに、ノープラってこと？

言ってしまえば、毒の米で雀の一羽や三羽が死のうと、国際連合は動かない。

だから、なぜ、彼女が紙吹雪を浴びながら涙ぐんでいたのか、もう、分かる人には分かるよね。

分からぬ人にいくら説明したって無駄なんだな。

童女のように無心に戯れるからこそ、玩具には価値がある。無心だからこそ、大切な紙風船を踏ん付けてしまう。何の不思議もない。

よく言うよ。彼女は、わざと踏ん付けたんだよ。映像が残っている。上映しようか。

止めて。止めて。止めて。もう、意地悪なんだから！

暗転。

彼女は喪失感の喪失を深々と味わいたくて、傍らのシガレット・ケースを引き寄せた。

そして、点火。

バム！

さて、こんな話をしてくれた親友は、彼女が彼の二番目の妻になり損ねた女優だとは、ついに明かしてくれなかつた。

親友とは腫瘍の異相である。

三 ありふれた落下

片羽に火が点いていることは知っていた。彼女は、徐々に疑い始める。

「私の翼は人工物なの？」

その疑いに酔ったふりをして、本当にうつとりとして、ゆるゆると落下し始めた。いつか、こうなるような気がしていたのだ。待ち望んでさえいた。

墜ちながら、肩に微かな痛みを覚えた。やっと肉の感じが戻ったようだ。やがてこの感じが疼きに変わらるのだろう。待ち遠しい。

縮緬のような海面に小さな影を発見する。過不足のない記号だ。波間から飛び魚が熱っぽい視線を送ってくる。ふんと鼻で笑ってやるが、嘲りは極端に減少している。

「あそこ？　いや、あそこだ。違う。もっと遠くよ」

いつからか、「明日になれば」とだけ唱えて、何度も唱えて、この空を翔けてきた。でも、もういいんだ。明日は来ない。顰め面は無用だ。付け睫毛は無用だ。

運命とか、稀有な情緒とか、就中、無線とか、もう要らない概念だ。

海の青い頬にキスしてあげようか。

「顔色、悪いよ。うふふ」

ところが、風の、墜ちながら受ける風と海風の乱流によって生じた擦過傷は、酷い記憶を蘇らせた。つまり、風習を蘇らせた。

「欲しかったのは、海ではない。この海ではない。別の海でもない。もっと青い……

空？　空だわ。抜けるように青い空。高い、高い空」

気付くのが遅かった。彼女はもう上昇できないのだ。片羽は消失した。

「海の青は、空の青の反映でしかなかったのに、私は騙されていた。海に騙されていた。知っていたのに。騙されていると知っていたのに、騙されている自分が好きだった」鏡が好きだった。自分を美しく見せてくれる鏡が好きだった。

空さえも鏡だったのだ。

彼女は空の高みという真空を抱えた紙風船を潰せなかつた。しかし、海を割ることはできた。

古代の荘厳が開いた。

彼女は海に沈んだ。彼女は魚にはなれなかつた。珊瑚にもなれなかつた。彼女は、浮き上がり、片羽の水鳥になつてゐた。飛べない鳥になつてゐた。

化粧する彼女の瞳に向かつて、爪に貼り付いた青い棘がじりじりと迫り来る。

何の前触れもなく、フィルムが燃えた。

56 修整された渚

殺戮の予定された渚よりも黒い憧憬が落ちている

潮よりも苦い血潮が夕焼けの砂に垂れている

僕は赤い雲よりも軽く殺す

愛するために殺すのではない

殺すために愛する 幼い海鳥を

殺戮の予定された渚よりも黒い悔恨が落ちている

今始まったばかりの楽章よりも別れに近い夕風が吹く

僕らは散歩する 別れのために

僕らは黒くする 猛禽類の嘴のように

滑走路の傷跡のように 類人猿の未来のように

踵のない靴に見合う雨よりも優しい愛撫がある

僕はカフェの窓に落ちてくる九月の処女よりも軽く

マッチを擦る

殉教の故人を思い出すために

それほどに黒い渚がある

黒よりも黒い黒がある

殺戮の予定された渚よりも黒い黒がある

57 幻の翼

男は四十七歳だが、若者のように、突然、叫んだ。

「その爪！」

女は体に巻いたタオルの端をちょこんと乳房を推すようにして差し入れながら、ゆったりと応じた。

「えっ？」

「えっじやありませんよ。その指、どうしたんですか」

「指なの？ 爪なの？ どっち？」

女は煙草を銜え、マッチを探すふりをして時間を稼いだ。男は、からかわれているような気がしたが、からかわれる理由が分からなかったので、黙っていた。

沈黙は、ときとして有効な攻めなのだ。

爪が真赤だ。そして、その先端から赤い液体が垂れている。まるで血のようだ。タオルがじわじわと染まる。

「爪……」

「はい。爪」

「血か？」

「だったら、何よ」

「痛くない？」

「何が？」

「手だよ」

「今度は手なのね？」

男は、慌ててズボンを引き寄せた。

「こら。逃げるな」

「逃げやせんが……。その……」

女はパーを作って、掌で男の人差し指を押し返し、へらっと笑った。

「チョ、チョキ」

男は、鉄を出した。女は拳を握った。

「グー。ぐぐぐ」

男は負けた。

「痛いんだろう？」

「負けたあんたはどうなの？ 痛い？」

「いや……」

「あたしが痛かろうがどうだろうが、関係ないでしょ？」

女は胡坐をかいて、爪あるいは爪の抜けた痕に赤い何かを塗り始めた。赤チンか。マニキュアか。塗り終えた指先を眺めながら、女は話を続ける。

「忘れないのよ、痛みを。思いださせないで。同情は有難迷惑よ」

「君の体を気遣ってやってるんじゃないか」

「そら、来た。遂に体だ」

痛がりながら、男を見て、くすくす、笑う。男は、ズボンを穿きかけたまま、突っ立っていたのだ。そのことに気づいて慌てて引き上げようとしたが、もたついて、また笑われてしまった。

「あんたは自分が体制の奴隸であることを否認するために、弱者を見かけると憐れむふりをして、自分をイイコイイコするんだ。このイイコイスト」

男は理解できなかった。だから、ちょっとしょぼくれた。女は男の頭を引き寄せて軽く撫でた。

「本当は優しいんだよね」

男は答えなかつた。

「じゃあ、次。あんただよ」

「えっ？」

「寝なさい。そうじやなくて、俯せ」

おとなしく言われる通りにした。女は跨つた。

「何してんの？」

「塗ってんのよ、爪に」

「えっ？」

「あたしの爪なんだからね、抜けても」

男は、自分の背中を想像した。肩甲骨の下に女の爪が五本ずつ、左右に生えている。まるで抜け落ちた翼の痕のようだ。

「ああ。二十年。そうか。二十年だよ、あれから。いや、もっとかな。少年航空兵だつたんだ。特攻を志願した。戦後、ずっと、背中が変な感じだったんだが、君の爪のせいなのかな」

「ちょっと黙ってて」

ちょっと黙っていた。

「ねえ、君。名前、教えてくれるかな」

「忘れたの？」

「ごめん」

「アンナ」

突然、背中に激痛が走つた。焼けるような痛みだ。狭い所に閉じ込められ、ベルトか何かで縛り付けられているみたいだ。握っているのは操縦桿だから、ここは操縦席だろう。操縦桿はびくともしない。背中がひりひりと痛む。空気が足りない。この体は燃えながら墜落する定めなのだろう。

ああ。そうか。自分は、まだ、若いんだ。十七歳だ。そして、今は昭和二十年なのだ。

——自分は間違っておりました。戦後は夢でありました。
「黙って！」

58 鞍靼人の舞踏

灌溉用水が砂漠を抜けて海に注ぎかける辺り
明快な旗印が山々に向かって垂れている
女たちは大昔から暖炉の前で器用に古雑誌を広げ
意味ありげな談話に明け暮れていた
何もかも弁えた眼差しで老猫が欠伸をしたら
月とは無関係に祭りが始まる

ここは地の果て 見るなの街
赤でも緑でもない 鮮明な黄色
白でもない 黒でもない 危険な黄色
天使でも悪魔でもない 亜細亜の黄色
黄色の市が立つ
黄色の商品が並ぶ
黄色の貨幣が音を立てる
鳩は寺院の屋根を捨てて地に豆を拾う
鐘は眠るように揺れている
住人たちは朽ちかけた門をそのままにして
流浪の民の行列を窓から覗く

誰もいないのではない
誰もがいないふりをする祭りの真昼
躍っているのは到着したばかりの鞍靼人だ
住人達は見てしまった
見てはならないはずの彼の横顔を
潮の満ち引きのような
高い崖の上から流れ落ちる滝のような
鞍靼人の舞踏を
黄色の樹木と黄色の空と黄色の舞踏を
だが 彼の肌の色を誰が見たらう？

ここは地の果て 見るなの街

誰もいのではなく
誰もがいのないふりをする祭りの真昼

59 宵闇迫れば
彼女は山肌を食卓に並べて青空を
占う
尾骶骨が尖った砂金を選別しながら
夕餉の匂いを指している
何者かに眠りを犯される夕暮れ
春を鬻ぐように街灯を売りに出る
豚と月は一つに溶け合い
初めて聴く律動の崩壊が
取りとめのない地下鉄の線路から伝わる
神と青空の狭間で眠りのための音楽を採譜する
違ったままで訂正されない愛の苦悩に似ている
彼女は
占う
古い縫合機の律動が桜ん坊のように停止し
長い霧笛の接近が薄桃色に輝く日を
占う
瞬きから始まった青空を見ようとして
瞑目する骨牌の挑戦を受けて
柔らかく溶ける肩甲骨が扇形に上下し
夜気の注がれてゆく炎を凝視するときの
あの視線を罰するために
彼女は凍えた皮膚に淡い息を吐きかけながら
占う

60 鳩
射抜かれた鳩の胸の弾性
密やかな影像を従えた鳥類一般の
変化に富んだ野心と
叢にのべられた武器の
鳩笛のように優しい佇まい

陰と影とを引き裂きながら
先端において縫合を企図する武器の
逆立ちした意図
本当らしい 優しさ
純情な景色
炸裂に似た景色
夢に見たつけ
白い羽毛が鮮血に染められ
ぱらぱら ぱらと
散る朝の
青空の奥底に落下する鳩を
確かに水の匂いのする夜明けだった

61 わたくしの鳥

断言への急降下式冷凍庫はヒューズを飛ばす
新鮮な腐臭の氷柱を螺旋に抉る わたくしの鳥
初め酷薄な紅 次に執着の代赭
午後への放尿が翼を畳みながら
葬送の先触れを装う
可逆的常温保持器の交響曲に向かって
凹部の頂から身投げする わたくしの鳥
初め酷薄な紅 次に執着の代赭
巴旦杏の破片に縁どられた独楽が瞑目する正午
わたくしは銃床から頬を離す

62 残暑は苦手

誰かを探しているようで、実は自分が見付けられたいだけだということが丸わかりの矢野氏のきょろきょろする様子を見たとき、私はほっとした。私は彼を待っていたわけではなかったからだ。

矢野氏は私に見られていることがわかると、左肩に掛かった髪の毛の先を摘まんで引っ張って左を向き、わざとらしく怯えたように肩を竦めた。私以外の顔見知りを探しているのだと思わせたがっている。私は、さらに安心した。奥までやってくると、初めて私の存在に気づいたように首を引き、どんな人間でも歓待の仕草をしてやらなければ不道徳と見

なされかねないような笑みを浮かべたが、それが凍りついて笑いの仮面のように見えたので、何か特別の意図でもあるのかと疑い、対応が遅れた。

特別の意図？

矢野氏が近くに来るまで、どうしていいのか。ずっと見ているのか。そうすれば、彼は不十分な挨拶を残して、遠ざかってくれるのかもしれない。そんなことを考えていると知られたら面倒だから、どう面倒くさいのか、そんなことを考えるゆとりはないのだし、本を閉じるのもあんまりだから頁を捲ったが、指が震えて、数頁、進んでしまった。もう筋が分からぬ。本を閉じた。立ち上がり、出口へ向かう。カウンター席に並ぶ背中のせいで狭くなった通路に差し掛かり、互いに身を捩った。

「帰るの？」

男の声を背中で聞いた。振り返ると、彼は私の手にしている本を奪い取り、私の居た席の反対側に腰を下ろした。

無音。

客たちは私たちの芝居を見ないふりして、でも、見ている。「坐れよ」と誰かが言ったみたいだ。そんなはずはないのだけれど、私は坐った。

どこかでウエイトレスが金属の盆を落した。

本を取り戻そうか。面倒だから、あげちゃう？　でも、後で返しに来るかも。いいのよ。上げる。要らないよ。そう？　こんな本、読まない。

矢野氏は読んでいる。あるいは、読むふりをしている。顔を上げてくれるのを待とうとしたが、待っている時間が長すぎたら変になるから、深々と坐り直した。ここ、私の縄張りだからね。

わざとらしく尋ねた。「いいかな？」

答えがない。今、鬱期らしい。だったら、私にとって都合がいい。さっきの質問をどうしたら始末できるか、考えなくてもよさそうだ。

その日は、特に変わった日ではなかったが、この頃、ずっと暑苦しいんだよね。だから、地下に逃げ込んだ。矢野氏も、きっとそうだろう。

私は周期的に起きる軽い片頭痛に数日前から苦しんでいた。その苦痛は欲情に似ていって、何となく恥ずかしい。病気を売り物にする矢野氏と、私は違う人間だ。しかし、冗談半分でも苦しみを分け合うみたいな遊びを仕掛けられたら、乗らないわけにはいかない。困ったな。

「近頃、どう？」

先手を打った。

「ふん」

少し間があって、「ううん」と小さく唸ってから本をテーブルの端に置き、角と角を合わせて一秒後、押し返すような感じで、指先で数センチ、こちらへ動かした。受け取れて？

私は煙草を、一本の半分ほど吸っていた。それをぐいと揉み消し、借りた本に手を伸ばす。少し遠いぞ。意地悪か？ あるいは、人の迷惑など、微塵も想像できないほど、鬱なのか。腰を浮かし、取り戻した。読みかけたページを探す。見つからない。

「今日、バイトじやなかったっけ？」

本をショルダー・バッグにしまいながら、相手に視線を送らずに言った。案の定、答えはなかった。どこかで誰かが笑った。

「休んじやったよ」

「寝てた、今まで？」

「パチンコ」

「勝った？ 負けたんだよね」

「明日から食ってけない」

煙草の残り少ない一本を数センチ突き出したが、辞退された。矢野氏はセブンスターを吸わない。

「あの人、どうしてる？」

「さあね。図書館かな」

ドラム・ソロ。

沈黙を正当化できる。

ウエイトレスが水を運んできた、どこか遠くの泉から。

「君たちは読み過ぎなんだよ。あつ。コーヒー、ホットで」

私は、読み過ぎてはいない。答える代わりに、私はぬるいココアを、音を立てて啜った。甘みが消えている。

会話が続かない。誰か共通の知人がいれば、そいつの悪口でも言って時間を潰すことができるのだろうが、しかし、そんな人はいない。いるのかもしれないけど、思い出せない。白旗を掲げるみたいにハンカチを取り出し、濡れていない唇を拭った。

矢野氏は笑った。私は照れ笑いをして見せた。

「実はね」で、息が切れたが、長く待つ必要はなかった。私が悪乗りして、少し耳を向けるように右肩を出すと、矢野氏は逃げるよう身を逸らしながら、発声練習を続けた。聞き取れない。私は喋らせたくないから尋ねた。

「どうしたのよ、深刻そうに」

「いや、何ね、その何だかさ」

嘘を揃えているな。

「たとえばさ、こんな話、どうかな？」

「たとえね？」

「そう、たとえば、だよ、ここにユーツな少年がいる」

「あなたみたいな？」

「さあ、どうかな。自分のことは、よく知らない」

わざとらしくはしゃぐなよな。

下手に眉を下げたので、皮肉っぽく見られたらしい。矢野氏は、慌てて自嘲めいた苦笑を浮かべた。汚い。ちえつ。

「実はね」

「あら、実話なの？」

「ある少年が昼過ぎに目覚める。パチンコでもやるか。映画を観るか。本は読まないんだよ。とにかく、穴倉みたいな小部屋の天井をいつまでも眺めていたくなかったから、自分で自分を急かして表に出た」

「ふうん。何だか、小説の始まりみたい」

「すると、眼の前を野良犬が通り過ぎた。そいつは目が開いたばかりの仔犬という感じなんだ。しかも、頭が極端に小さい」

「色は？」

「色？ 何の？」

「毛色よ」

毛色なんか、まるで気にしていない。

「さあ、どうだったかな。黒……。じやなくて……」

「モノクロ映画ね」

「はあ。その案、いただき。その少年の目の色彩感覚は薄れていた。灰色の犬を見たとき、自分はまだ夢の中にいるのかと疑った。ところがだ」

考える間を与えてやる。

「ところが、そいつを車が撥ねた」

「きやつ。見たのね」

「うん。少年が見たんだ」

その先、続けてあげようか。そんなふうに肩を揺すった。矢野氏は、天井を見ていた。

「そう。見たのは少年だ。仔犬はキャインとも何とも言わずに……」

私は待った。

「死んじやつた」

「おしまい？」

「そうだな。おしまい」

「終わってないみたいだけど」

「うん？ そうだな。鳴かないどころか、歩道に落下した音さえしなかった。小さな音はしたんだろうけど、騒音に搔き消されたのかな。とにかく、彼の耳には届かなかった。届いたのは死骸だけだ。足元に届けられた。音がしなかったもんだから、まるで……」

「サイレント」

「そう。『カリガリ博士』みたいな」

「じゃあ、少年は博士に洗脳された夢遊病者ね」

「博士？ ええっと、誰が？」

私は、くすつ。

「寝惚けてたのは、あなたでしょ。で、あなたが博士なのよね」

「難しいこと、言うなあ。本の読み過ぎだってば」

私は、どきつとした。もしかして、轢き殺されたのは仔犬ではなく、少年だったか。矢野氏はショックを和らげるために、少年を仔犬と取り替えて、その嘘を自分では信じられないものだから、誰かを騙して、たまたま、私がいたから、だって、私のこと……

「あのね、なぜ、その少年がユーツになったかって言うと……」

もう、聞きたくないな。矢野氏が病気の話を始めたら、遮るために頭痛の話をしてやろう。

「その仔犬の目を見ていたからさ。見ていたというか、目が合ったんだな。仔犬は、どこからともなく現われて、ガード・レールの支柱に凭れていた。何を見て、いや、何を思って、うつとりしているんだろう。死の影を見ていたんだろうな。少年がそのことを思いだしたのは、仔犬が彼の足元に落ちてきた瞬間なんだ」

「わかった。あなたは死の予感を影として察知したつもりになれるほど……」

「僕じゃない」

「ああ。彼ね。彼はあまりにも鋭敏な感覚の持ち主で、自分の未来と仔犬の現在を混同し、恐怖のあまり……」

「キョーフ？ 何が恐ろしいの、うつとりしているのに。恐怖と言えば言えるけど、それは微妙な恐怖で、奇妙な脅威で、白けたというか、あの、あの……」

「わかる。わかる」

「じゃ、おしまい」

矢野氏は笑った。声を出さずにだけ、初めて笑った、今日初めて？ 生まれて初めて？ いつ、生まれたのよ。どこで生まれたの？ もしかして、ここ、萌芽落花？

(3)

少し寒くなった。冷房の効きすぎかな。地上に這い出る。外気の熱が懐かしかった。

デパートの屋上で麦酒を飲んでいたら、当然のように日が暮れた。待っていたわけではない。会話は弾まなかった。ロープに吊るされた電球の芯が仄かに明るんだ。

「あいつは、キャインとかギャオとか、声を上げるべきだったんだ」

私は聴こえないふりをした。聴こえないふりをしているということが相手に伝わると高を括ることにした。絶望遊戯には付き合えない。

「歩道に落ちても、何の音もしない。なぜだ？」

私は割り箸の袋を折っていた。さて、何ができるかな。

「ちょっと難解だな。そういう気分は小説ではなく、詩にすべきよ」

「あの人なら、そうするって？」

「知るもんですか」

「君なら？」

「私に代作しろって？」

「ゴースト・ライター」

言いながら笑っている。私は厳しい表情をわざとらしく拵えた。私は幽霊かもしれない。すでに死んでいて、仔犬を抱いてあの世に旅立つって、悪くないかも。

「でも、鋭敏な性格を与えない方が楽だと思うよ」

矢野氏は自分が鋭敏だと勘違いしている。

「彼は鋭敏なんかじゃないよ。普通だよ」

「へえ。普通かあ」

「極々普通さ。ただ、そのことに気づいていないだけなんだ」

「仔犬は？」

「知るもんか」

矢野氏は横を向いてジョッキを抱え、少しためらってから、泡の消えた少なくない残りの液体を二口で飲み干した。

「で、その少年は……」

もう、止しなさい。

「思い出した。仔犬を撥ねた車はおかしな動きをしていたんだ。狙ってたみたい」

「わざと？」

「わざとって言うか——」

「事故でなく事件でもない。じゃあ、普通だ」

「轢いてはならない。でも、手遅れだ。ええい。ぶつけちゃえ。葛藤の苦痛から逃れるために車は罪を選んだ。不可抗力という名言が天下った」

「もしかして轢いたの、あなた？」

「轢いたのは車だよ」

「だったら運転してた人は無罪ね。彼は傍観者なの。そして、彼自身の人生の傍観者でもあるのよね。だったら、車を停めなかった少年は共犯者だ」

「そうなるかな」

「そうなるかも」

私は帰りたくなった。空のジョッキが「帰ろうよ」と言っている。

「車はタイヤの痕を残すけど、少年は何も残さない。残せない、死体さえも」

「要するに、運転者の内面が車の動きとして表出され……」

「違う！　違う！」

誰かが私たちを訝しげに見ている。

「帰ろうよ」

しばらくしたら矢野氏がそう言ってくれるはずだ。

割り勘。食えなくなるのは明日からでしょ？

私は歩きだ。矢野氏は駅に向かわず、私に従う。夜だからね。

さようならの代りに言ってやった。

「さっきの話、よくわかんないから、小説にでもして見せてよ」

遠くに唾を飛ばしやがった。

「あつ。小説は諦めたんだっけ」

「落ちを付けようか。少年は、数日後、あの車に再会する。ちょっと変かな。仔犬の死骸がなくなったあたりを歩いていたら、すうっと車が近づいてきて、中から声がするんだな。ココワドコデスカ？」

「まあ。いいよ」

「いいかな？」

「いい。で、ユーツがいっぺんに吹き飛んで、少年はサラバって言うの」

「そうか、そうか」

酔いのせいもあって、私たちは妙に意気投合した。お芝居と本気の区別が付かなくらしい。お互い様だよ。

夜の街は、このままにしておくのがもったいないみたいに煌めいている。死にそうな仔犬の濡れた瞳を連想した。

「送ってくよ」

「……うん」

あの人が来ているかも知れない。

「前まで」

「うん」

私は矢野氏を見た。

「泣いてる？」

「えっ？ 何で？」

街灯の数が減っていく。

いくらか残った酔いと微かな躊躇いとのせいか、矢野氏の歩みは遅かった。やがて立ち止る。すると、眩しいライトが私たちを包んだ。矢野氏は手を翳し、顔を歪める。醜い。狙っていたみたいに車が近づいた。

「あの、すみませんが、ここはどこですか」

ここらは矢野氏の縄張りではないから、答えられない。私が笑いながら返答した。車がり去っても、私は笑っていた。ライトのせいで視力が回復するのに、しばらく時間が必要だった。その時間を確保するためにも、くすくすと笑い続けた。そして、笑わない矢野氏の脇をつづいた。

「よせ」

私は黙った。つづいた指を自分の頸に当てた。

「なぜだ。なぜ、教えた？」

「え？」

「あいつが少年を殺したんだ」

「仔犬でしょ？」

「そうだ。仔犬だった。いや、どうだっていい」

私は部屋に誘った。矢野氏は、私に初めて会ったときのような顔をした。

「君は誰だ」

「誰って……」

「いや。名前だよ」

「忘れたの？」

「そうじゃなくて、名前、下の名前」

「忘れたの？」

「忘れちゃいないよ。でも、確かめたいんだ」

「じゃあ、呼んでごらん。正解だったら、ピンポーン」

「君の声で君の名前を聞きたいんだ」

私は黙って矢野氏の肘を掴んだ。

「帰るよ」

矢野氏は私の掌を残して、来た道を戻り始めた。私は二階の部屋を見上げた。窓が開いている。誰かいいるのか？ カーテンが揺れている。風だろう。部屋の中は闇だ。本当の闇だ。

私は矢野氏を追いかけて捕まえた。彼は仔犬のようにおとなしかった。私は彼を見なかった。アパートの階段を上りながら、「落っこちろ」と何度も念じた。

部屋には誰もいなかった。蛍光灯は明るすぎた。文机の電気スタンドを点けて、蛍光灯は消し、電球一個分の光を玄関に向けた。ドラマで刑事が容疑者に向けるときみたいに。

半開きのドアを誰も閉めてくれない。スタンドを床に置き、光を自分に向けてから、外のどこかに隠れている誰かに向かって口笛を吹いて手招きをした。

そして、何秒か、何分か、もしかして何時間かして、「友だちは大事にしなくっちゃ」と、喉を使わず、そっと呟きながら、ジーパンに手を掛けた。

頭、痛い。

63 回り続けろ

瞼が銃口のように閉じない真昼

浜辺に海驥の群れ

また再びの空砲

欠伸のような挑発

出欠を確かめる教師の傲岸と遅刻者の悲嘆

歯を剥き出しにして笑う木馬よ 回れ
廻り続けろ
宇宙鳥の止まり木よ
寄せ木細工の月よ
木端微塵だ
ぶちまけろ 絵具箱
さて
夜の羽虫どもはときおりゲップして
女性形の巨大鉱石！

64 破局

マッチ擦る音のみ繁き喫茶店 惰りてあり日々の懺悔
秋風に優しく舞い散る安全弁 並木の影を切り裂くように
君の目の指摘したまう我が習い 君は知らずや終わりてありしを
寒風に巻かれてしまえ我思い 巷かれながらも巻かれぬふうに
肌寒き白熱灯に似た悔悟 山脈の向こうに故郷は消え
覚めてある人の眼差しに似たり我に向く 冷めよとばかり熱き鋭さ

65 中秋無月

坂道の途中に女が独りで立っている。上ろうか、下ろうか。月を探す。
さっきまで月光に照らされていた寺に、あの人と初めて訪れたのは、夏だった。「秋に
また来ようね」と約束した。
秋が深まり、まるで揺えもののように葉が色づいた。遠くは染物のように見える。
「秋が降りて来る」
声に出した、念じるように。
昔、惟光の出会った女たちに、今、会ってみたい。小さく笑った。会ってどうするの
か。聞いてみたいのだ。
「どうしたら鬼になれますか？」
斑に緑の残る落ち葉を拾い、そして、躊躇いつつ、捨てた。
彼女はあの人を捨てに来た。あの人との思い出を捨てに来た。
あの人は、日頃は弱虫なのに、酒が入ると、むきになる。そして、女を打つ。彼女では
なく、女を打つのだ。力なく、方向も定まらない。わざと避けないでいたら、火に油を注
ぐ結果になった。
「何て女なんだ。何て女なんだ」

他に言いたいことがあるんでしょう？

「女なんて——」

深夜、世界に目覚めているのは二人だけで、そして、睨み合っている。裸電球は、慣れてしまえば暗くなく、寧ろ眩しい。

ここにいたくなかった。駆け出したかった。でも、逃げたら負けだとも思った。どちらが自分なのか、区別できない。逃げる自分と逃げない自分。彼女は謝った。あの人にではない。もう一人の自分に謝った。そのことがばれた。あの人は尻餅を搗いて息を半分ほど吸うと、腕を大きく振って灰皿を投げてきた。吸殻がばらばらと落ちる。灰が舞う。灰皿は彼女の太腿の横に落ちて回った。

「何だ、それは」

髪留めの櫛を抜いて構えている自分に気づいた。その先は、正確にあの人の目に向かっている。

串を落したのは、ドアの閉まる音を聞いて、しばらく経ってからだ。

夜中過ぎ、あの人は、ぐでんぐでんに酔ってやって来た。部屋に入るなり、どさっと横たわり、彼女の膝に這い寄って枕にし、動かなくなつた。目を瞑り、ぼそぼそ、言っている。いつものことだ。聞き飽きた。

「生きてたくない。もう、いやだ」

「私も」

答えはない。眠ったのか。額を撫でながら、聞いた。

「殺してあげましょうか」

「殺してあげようね」と呟きながら、捨てた落ち葉を拾い、髪留めの串を抜いて、ぽつんと穴を開けた。目を近づける。穴の輪郭が徐々にぼやけ、そして、なくなった。瞬きの度に睫毛が葉脈を擦る。遠い山脈が近づいて来るみたいだ。

暗い秋が、すっぽりと彼女の目の中に納まつた。

すると、秋が降りて来て、彼女をすっぽりと包んだ。

66 交差しない

矩形の一辺を消去する

全面的な和解の半径に残余が走る

矩形の一辺を消去する

退屈な対位法を奏でる噴霧器とシガレット・ケース

矩形の一辺を消去する

彼方から訪れる泥団子をゆっくりと噛む

マーガリン使用上の注意

遊泳禁止

柔らかく落ちるのは怠慢である
痛く落ちるのは傲慢である
耐えることのできない矩形がある
矩形は 耐えてはならない事態に耐えられない
ゆえに矩形の一辺を……

交差しない円を夢見た？

67 会釈

会釈
それは塔のようだが
色は黄色だ
それが塔になるとき
私は斃れる

私の切削は それを塔と名づけない
それがどのような塔であるか 告げない
塔のようなものに塔を返さない
塔のようなもので塔を壊す

私は日々崩れる
日々確実に崩れる

彼女は言った
もう会えない と
それは塔のように見えるが
すでに私は崩れた
と私は言った

ある柱状の何かを その影が支えている
色は黄色だ
影が塔になるとき
私は崩れる

私の裏切りは
私を裏切る
私の欲望の深さは
私の欲望を裏切る

先日
体臭のような塔を見た
見た?
見たのか?

拒む
落丁の頁に書かれていた文字を
拒む

塔は拒む
私の欲望を拒む
私の欲望の深さのような塔の影を拒む
私は拒む
塔を拒む
塔のような何かの影が支える黄色の塔のような物体が支える影の
黄色の塔のような何かの影の黄色を
塔は拒む
私は拒む

彼女は言った
もう会えないの と
それは塔のように見えるが
すでに私は崩れた
人間が自らの体臭に恋する安らぎを
落丁の頁を探すことを
私は拒む
と私は言った

ある柱状の何かの影の深さを
私は拒む

それが塔になるとき
私は崩れる

塔の高さを影によって測るな
私の欲望の深さのような塔の高さを測るな

塔の深さが私の高さを超えるとき
私の欲望は私を拒む
あれを塔と呼びながら
私は崩れる

それが塔であることはない
塔は拒む 塔と呼ばれることを拒む
塔のような何かが塔であることを
塔は拒む

塔によって拒まれた柱状の何かの影が支える黄色は
塔を拒む
塔は塔のような何かを拒む
塔のような何かは塔を拒む
塔は
塔を
拒む
そのときだけ 私は拒ま、れ、な、い

彼女は言った
もう会えないのか と
それは塔のように見える
と私は言った

塔ではない何かは
塔ではない

66 笛
森の奥で笛が鳴った

青空は走り出す
闇へ
(急な下り坂を思い出すと
いつもひやりとする)

68 無題

声が
のっぱらを渡って行った
君は
百連発を空へ向けて連射する
みんな 何だか 照れ臭そうで
山羊がするように
低く身構えた

あの声を聞いたものは手を挙げろ

帰りたいものは帰れ

ここから

僕は莢豌豆のようなちんちんを出す

69 就眠儀礼

たったたたつと 六法を踏むようでもあるし
ただのまずい着地のようでもある
語尾が吃るというのではなさそうだが
苦しい言いわけに
小銭をじやらつかせるようで
けつまずいた片足をもう片足が庇って
おどおど いじいじ
にじり寄り
モオネマショウネでは
就眠儀礼にほど遠い
夜気を深く吸って思いを湿らせれば
分け前にありついた鼈のように
悔恨が

数冊の古雑誌に紛れ込む

70 わたくしのまつげに
わたくしのまつげに
松葉のような黒さの
わたくしの待ち続けてきた
嘘のような黒さの
わたくしの肌を刺しながらも
貫くことの決してなかった
そのわたくしのまつげに
触れるほど間近に
わたくしのまつげに
触れる松葉のような黒さの
わたくしのまつげに
そのわたくしのまつげに
触れそうな
わたくしの待つ震えの
わたくしのまつげに
今夜

71 石

石の内側にある石を見ている
石の内側でしか石は拾えない
ぼくらは その石を内面と呼ぼうとして
すぐに言い濶まなければならない

石を削ると石の粉が零れる
石は逃げてゆく
石はインク壺ではないから

冬が来て石が
はにかむ誰かの横顔に似てくる
触れると寒天（黒蜜入り）のように震えそうだ
だが 震えない

ふるふると震えない

冬の夜
こんな詩を書いて過ごす
震えながら

明日の朝
石を拾いに行こう
雪を搔き分け
泥水を分泌しそうな石を見つけて
握り締めたい
絞るように ぐっと

石は自ら飛んで行く
山歩きのとき
ぼくらの影の中から不意に飛び立つ雉のように

72 オオトツクニ

エ
エデ
パマラバ
ハヤ
ウヌ
ト
ラエデ
エデ
オオトツクニ
パマラバ
ツニ
トウウヌ
カヤ
グヌニ
アドレバヤ
カノヌレビカモ
グルウヌ

ケヤシコノサバム

クヌ

スヌ

エデ

オオトツクニ

パマラバ

ハヤ

アドレイモ

トヌ

クウヌ

ハヤミセバ

ナヨ

トウル

トウウル

エデ

オオトツクニ

パマラバ

ハヤ

エデ

オオトツクニ

パマラバ

エデ

オオトツクニ

オオツツクニ

ハヤ

73 ポンポコポン

消しゴムってさ、最後まで使い切ったこと、ある？ 最後までは無理か。とにかく、これ以上は摘めないくらい小さくなるまで擦ったことある？ ないよね。消しゴムってさ、あれ、いつの間にか、なくなっちゃうんだよな。まだ使えそうだけど、思い切って捨てちゃった、なんてこと、あんまりないだろ？ 本当、どこ、行くんだろうね、消しゴム。

消しゴムってさ、あれ、字を消すだけじゃなくて、自分も消しちゃうんだろうかね。

ずっと前から気にかかっていたことがあってさ。落書き。便所の落書き。眠れない夜もあったよ。まるで初舞台に立つ前日みたい。覚えてもいない台詞を思い出そうとするふりをしたりとか、間の抜けた溜息をわざとらしくついたりとか、そうそう、メロディーが頭

の中で鳴っているのに歌詞が出てこないみたいな、そんな感じかな。間の抜けた声を作つてみるよ。ふへえ。でも、わざとらし過ぎたら、逆効果だ。

あの落書きは自分にとって文字による生まれて初めての自己主張だったんじやないか。そんな気さえしてきた。今まで書いた手紙、日記、生活作文、論文その他、全部が全部、嘘で、あれだけが本当みたいで、惨めなんだよな。でも、まあ、考えてみりや、全部嘘だったかもね。日記さえ嘘だったのさ。くふふ。誰かに読まれても嘲られないように、綺麗事ばかり、書いてた。情けなくなる。詩なんて、もう、大嘘さ。詩人を気取るために詩を利用した。

白い壁が「書け」と命令しているみたいだった。だって、他にも、いろいろ、書いてあるんだよ。文字だけじやない。漫画もある。だったら、漫画にしどきや、よかつたんだ。漫画なら、ちょっとは自信がある。自信というのはさ、あの、嘘じやないってことね。いや、漫画なんて、根本的に嘘だからかな。

白い、でも薄汚れた壁が、「書けないのか」と、せせら笑っている。おう。上等じやねえか。書いてやるぜ。

シャツの胸ポケットから鉛筆を取り出し、丸い芯をむき出しにするために爪で木を筆りながら、考えた。何て書こう。書きたいことは決まっていたんだ。だから、便所に入ったんだもんね。でも、どう書けばいいのか。頭の中で捻くっているのが馬鹿らしく思えた。落書きなんて、脱糞と一緒にじやないか。糞に本当も嘘もあるもんか。あるの？

酔って人とけたたましくがなり合いながら、不意に、妙に白けた気分になって、「ああ、このがさつきは不自然だよなあ。声は本音が漏れ出ないための封印か」なんて思うと、酒が進むよね。どうせ、人生、アリバイ工作。生きてるふりのレ・キザラブル。

もっとも、自分の幼稚さに気づくのが遅すぎたから、気づいた時点から急速に記憶のフィルムが巻き戻して、壁の前で鉛筆を弄っている自分が見え始めた頃には、ココアが冷めていた。そこから物語が再開する、ちょっとだけ早めに。でもって、今に至るまで今に至らない。

えっ？ 何か変なこと、言ったつけ。

しかしだ、いや、だからか、ゆったりとした時の流れを自覚したのは、かなり後だった。誰かが誰かに語る気だるい声が聞こえて来たからだ。

「表現は揺れている。大理石や青銅や油絵具は、ゆったり、ゆったり、私という状況がオブジェとして韻晦するとき、表現は自立する自然美から逃げて二元的人間によってレイプされた循環なのだけね。つまり、マンネリなのさ、意図的真似リズムじやあ、なくて。言語すら、鰐同様、へらへらしてて、それがどこに記されるかによって、速度あるいは硬度が決定するわけよ。原稿用紙、原紙、立看板、初雪、木の葉、掌、壁……。ベルリンの壁。便所の壁。拘置所の壁。前を歩く男の壁のような背中に、裏切り者と書くとき、実は自分の背中に自分で裏切り者と書いている。敵意は自己愛で、表現は沈黙なのだ」

何、言ってやがる。そう言えたら言おうと思いつつ、声の主を探して見たけど、特定できなかった。

消そう。とにかく、あの落書きを消そう。何はともあれ、消してからだ。

「表現への意欲は表現の終わりとともに後悔に変わり、消滅への憧れという底無し沼に落ちる。表現者は表現者だったことを後悔し、表現者そのものを亡き者にしようと焦りまくる。落ちこぼれた自分の断片を拾い集めること。それがヒロイズムだ。言わば、岩場からの転落だ」

うるさい！

あの落書きを消したい。けれど、消すという行為もまた新たな表現になるのではない。そんなふうにも思えて、決心がつかない。

「周到に抉られた内面は能面の裏面でしかない」

鉛筆の文字を鉛筆で黒く塗り潰すのなら、表現かもしれない。「復元せよ」って暗示だね。でも、消しゴムで消すのなら、誰にも分らないように綺麗さっぱりと消してしまうのなら……

「止めを刺せ。止めを刺せ。止めを刺せ。二度と復活しないように！」

そのとき、消しゴムは持っていないかった。帰宅して、消しゴムを探した。いや、探そうとして止めた。どちらが実情に近いのかな。翌朝、探しもしないのに消しゴムが見つかった。それをポケットに入れて外出し、しばらく歩いた。布の上から消しゴムを押さえ付け、歩いて、歩いて、歩き回り、へとへとになって、萌芽落花に落ちた。昨日と同じココアを頼んで、それが運搬されて来る前に、便所に向かった。扉を開く。

すると！

落書きはなかった。見事に跡形もない。消されたという様子さえない。落書きなんか、もともと、なかったみたいだ。

「アンノンは死んだ」という文字はなかった。最初、「アンノンはいない」と書こうとしたんだけど、「アンノン」まで書いて手が止まった。もう少し訴求力のあるメッセージにしたい。「死んだ」を思いついて、にんまり。思い出すと、もうもう、恥ずかしいよ。ああ、忘れない。

消しゴムを取り出し、消す真似をしようか。ふん。消しゴムを噛んでみた。その味を想像しただけで、反射的に舌が押し返した。挟んだ指先で、軽く弾き飛ばした。ポンポコポン。実際には音もなく飛び跳ねて、消しゴムは視界から逃げ去った。

消したのはアンノンか。

アンノンは死んだんじやなかったつけ。

くふふ。

死ぬ前に消したんだな。

ふはは。

74 『雲の糸』論

手は運動する
手は躊躇ったり考えたりする
手は疾駆する
十万億土を駆け抜ける
銀河を経巡り
無量大数の生き血を啜る
手は頭脳である
死者の夢は走る
走る夢は雲の糸だ
かつ消え かつ結び 解れ
不意に
二〇時二四分のバスが
来ない
二〇時二四分の停留所が
壊れる
手
走る
糸
来ない
雲
夜の雲
街路樹の下の「雲の糸紡績工場前」に
二〇時二四分に来るはずのバスが
来ない
絶え間なくあり続けるしかない停留所にバスは
来ない
何者かに成り上がるこうとする陰謀の手先を遮る手が
死者の夢を見る
一つの割れた脳髄の
考えたり信じたりしない手が
走る だから
手は足なのだ
いつかは崩れ落ちる大気を 立ち上る
きみは知っていたのか 大地は

泣きたいときには 知っていたのか
泣けないものさ 泣きたいときには
泣けばいいのさ 横跳びに跳んで
逆立ちでも やればいいのさ
やればできるさ だって昨日は
蹴躡いただけでも そうしてたんじやないか
許されない ねえ
ごわごわするみたいだけど あれは
雲の糸かい
もやもやするのは雲の糸で編んだから
かい本当はそれほど軽い石だったのさ
岩石はマグマは地球は脳髄はそうして
きみはもう夢から醒めない冷めないつ
もりかい
なぜなら
手は走る
手には手の領分がある
恋人には恋人の匂いがある
手には手の領分がある
知識には限界がある
それはよく知られているわけではないが
手は走る
だから手は描くことができる
手は意図を手繰り寄せるのであって
思い出を残すのではない
思い出にならない軌跡があって
これを「雲の糸」と仮称する
(手の本質が眠る 本質と共に眠る)
まさか退屈しちゃいないよね

(付記)

『雲の糸』は相原信洋のアニメ作品だ。
これを観た後、誰もいない夜の停留所（街路樹の枝の間に見える雲が白い）で
バスを待つ間、無暗と言葉を書きたくなつた。だから、これは詩ではない。
感想文のなりそこないだ。

75 記憶

貧血の少女が耳の横で手をひらひらと振りながら私を見た。旅立つ人を見送るときのようだ。私は彼女に思い出されたみたいな気がした。私の記憶に間違いがなければ、私は彼女を知らない。

眼鏡越しに窓の外を見た。少女の視線を避けるためだ。どこにもないカメラが、私を、いや、私たちをズーム・アップしそうな気がした。私はありもしないカメラから隠れようとして、突然……

(私は何重もの嘘を吐いてきた)

と、言葉にして思った。

彼女は煌めく鉄棒を掴み、息を整えている。

劳わりの言葉を掛けようとして、私はまた嘘を吐くのだろうと考えた。声が、唸るように漏れた。電車が駅に止まりながら声を黒く塗るように声を潰した。

下りるつもりのないプラットホームに着地した。

振り返りたかった。でも、振り返らなかった。そのせいで、私を見つめている彼女の青白い顔を想像してしまった。

駅を出てから、行く当てがない。ありもしないカメラから逃れなくて、萌芽落花への階段を下りた。

私は何重もの嘘を吐いてきた。ある嘘は別の嘘と諍いを始めた。すると別の嘘が宥めにかかった。さらに別の嘘がやってきて、そうして嘘に嘘が重なり、混じり合い、溶け合い、現実と思えるほどに生長した。

ドアが背中で閉まり、カウンターの中の女が軽く頭を下げた。その前に、うっすらと親しげな視線を送ってきた。この店では始めてみる人だ。でも、数キロ離れた広い喫茶店でお運びをしている人に似ている。口を利いたことなど、一度もない。彼女は私を誰かと間違えているのかもしれない。

カウンターの下できゅっと指を組んだ。アイス・コーヒーを頼んだわけではないのに、彼女は水差しに氷の塊を入れ始めた。やや大きすぎるのがあって、アイス・ピックに手を伸ばしかけたが、止め、にやりと笑い、氷を素手で叩く。氷の粒が飛んできて私の頬に貼り付いた。

彼女の背後に、今流れている LP のジャケットが飾られている。

“We can create“

それがタイトルだ。

会わなくなる前夜、あの女は長い間瞑目して何かを待っていた。私の言葉だろうか。

「何を待ってるんだ？」

彼女はその問いを反芻しているらしい。だから、何も待っていない。

数日前、夢に老婆が現われ、こんこんと説教を続けるのだった。何を言っているのか、分からぬ。

「そんなこと、言ったって、もう、どうにもならないじゃないですか」と、私は何もかも分かったように呟きながら目覚めた。うっすらとした怯えに負けて、あの女の体をそっと揺すった。彼女は目覚めずに、ただ寝返りを打って、私のために場所を譲った。老婆は斜めに飛び去ったが、少し遅れて私の背後に横たわる影があった。

“Can we create?”

私は、頭の中で何度も呟いた。

“Can we create?”

この呪文によって、過ぎ去った季節は扼殺できるか。

さあ。もういいじゃないか。

そろそろ、口の利けない女たちを称えよう。私に触れなかつた貧血の少女を称えよう。

そして、私に氷の粒を飛ばしたウエイトレスを称えよう。

笑顔の彼女がカウンターにコーヒーを置いた。なぜ、笑う？ 私は今おかしな顔をしているのかもしれない。カップの音は聴こえなかつた。音楽に負けている。

聞こえない音を聞こうとして、そして、抗い、私は水から上がつた獣のようにぶるつと震えた。私に遅れて私の影も震えた。

同時に、風に抗う巻き毛から外れた簪のように、貧血の少女が丸く作った私の腕の中へ倒れ込んだ。

76 徐々に固くなる

尖ったものは軟らかい。

霞のように研いだ刃もそうだ。

輪積みの土器は違う。

(私は研ぎ師になりたかった)

彼女は口説かれているのだろうか？

私はあなたに触れようとしていた。

点、——線、——面、—— 徐々に固くなる

立体、——、世界の像（象牙） 日本から見る太陽は

地球から見る太陽は、固い。

どっちにする、赤と、白。

南北に路面電車が走る大通りの地下に

地下鉄を作っている。

私はほんのしばらく待つていればよかつた

のかかもしれない。

一人が穴を穿ち、
　　彼らが土を捏ねて、
一人が砂を掛け、　　一晩寝かせ、
　　熟成する朝に、
一人が叩き上げ、
　　尖ったものの柔らかさが、
内部を速やかに　　内部を固いものと
　　信じさせた。
そのようであったかと回想するとき、
私は急ぎ過ぎている。
私は待つべきだったろう、ほんのしばらく。

十六階建ての乗合自動車が
私の背後を　　(首だけが)　　音もなく……
　　問題は
切削機(削岩機)のように　　通り過ぎるまで
　　声ではなかつた
　　ようだ。
近々、大通りの地下を電車が走る
と「市民しんぶん」が報じていた。　　問題は
　　紙と木。

紙と木
は　　違う。
そのことを今までよく知らなかつた。
ああ、知らなかつたんだなあ
と思う。
そういうふうにしか語れないんだなあ。

あれは誰だ?　　見たことがあるような……
あつ。あいつだ。　　違う。似ていない。
目を細め、
小手を翳し……　　(手は今何もしていない)
振り返る、やがて……
(少々長過ぎる沈黙だなと思うことさえ忘れかけた頃、初めての僕が

ある。それまで)

私はほんの少しだけ待っていればよかったのかもしれない。

私はあなたに触れようとしていた。

鳥類図鑑の、隼の、
額から嘴にかけての線、
それが好きで、よく模写していた子どもの頃から
尖ったものは柔らかいのであったのに、
私は、そのときまで待てなかった。

マグリットの「狂信者」に、
信じることの固さへ身投げする柔らかさが描かれている。
だが、画面の中ではこの真実を誰も知らない。
知らないことの僕倅が描かれている。

いつか いつだったか いつでもなく
私はあなたに……

77 チンタラメノコ
ヘゲモゲアゲナノ
ツウトラキ
チンタラメノコノ
フンガ フンガ

78 要約すると

手が万年筆を強く掴み、もう一方の手がキャップを外し、両手はしばらく止まり、キャップを被せてからペン皿の横に落とす。先月号の雑誌を汚物のように摘んで、どこかにそっと投げる。雑誌の下から履歴書が現れる。両手がそれを覆うようにハの字を作る。

力なく広がる指の先に、見慣れない爪が生えている。

要約すると――

私はいない。

(『萌芽落花ノート』終了)

没 詰問

～某氏に指を差されて

キミノヒトサシユビノ

ナントマアタクマシイコトカ

ホレボレスルヨ

(終)

(うつしみへ)

書かれない戯曲のためのメモ

外科医の執刀のような湖

古時計の木製の歯車がしつくりと噛み合って流れる

時間のような居場所

舞台には誰もいないことの象徴として

半裸の盲人が立っている

夜明け前に華麗なるサインが置かれているだけでもよい

一人の観客の揺れる影がこちらに向かって長く伸びている

観客はこちらに背を向けているが

彼は背中で演技をしてはならない

ピンロージュという音の響きだけを形象化した木立と

泥塑の雄花と雌花が枯れている